

意志表示

社会主義労働者戦線結成によせて

6|65

● 革命的共産主義者同盟全国委員会 共産主義者同盟 長崎造船社会主義研究会



社会主義労働者戦線 参院選挙スローガン

目次

- 2 前衛はどこにいるか 梅本克己
- 4 社会主義労働者戦線参院選挙アピール
- 5 社会主義労働者戦線の旗のもとに——革命的共産主義者同盟全国委員会
共産主義者同盟
長崎造船社会主義研究会
- 10 ベトナムと私と選挙 浜野哲夫
- 12 プロフィールと略歴
- 14 意志表示 1 中島嶺雄 大島 渚 林 光 対馬忠行
- 20 意志表示 2 渡辺一衛 福田善之 秋山 清 大沢正道 西江孝之
マルクス主義公論編集部 社会主義労働者会議
- 28 意志表示 3 小山弘健 齋藤竜鳳 野田真吉
- 36 4・17 から 4・26 へ 広田 広
- 40 ルポルタージュ 国電ストの実現めざして 野島三郎
- 32 私の発言 荒川 澄 全通A支部長 進藤成志 北小路 敏 清水丈夫
青木五郎 浜下武志 田川和夫 一出版労働者 増田格之助
大井広介 鶴見俊輔 高知 聡 岩田 弘
- 48 酵母党となるなかれ 荒畑寒村
- 19 戦中戦後挽歌 佐野美津男
絵 中村宏
写真 北井和夫 大久保裕文

★ 迫りくる反動の嵐に抗して
戦闘的労働運動を築こう！

★ 日本帝国主義の侵略への道
日韓会談粉碎
原潜寄港反対
憲法改悪を阻止しよう！
ベトナム侵略反対！

★ 物価値上げを中心とする
収奪政策に反対し
労働者の実力闘争で
大幅賃上げをかちとろう！
合理化絶対反対
労働災害に断乎たる反撃を！

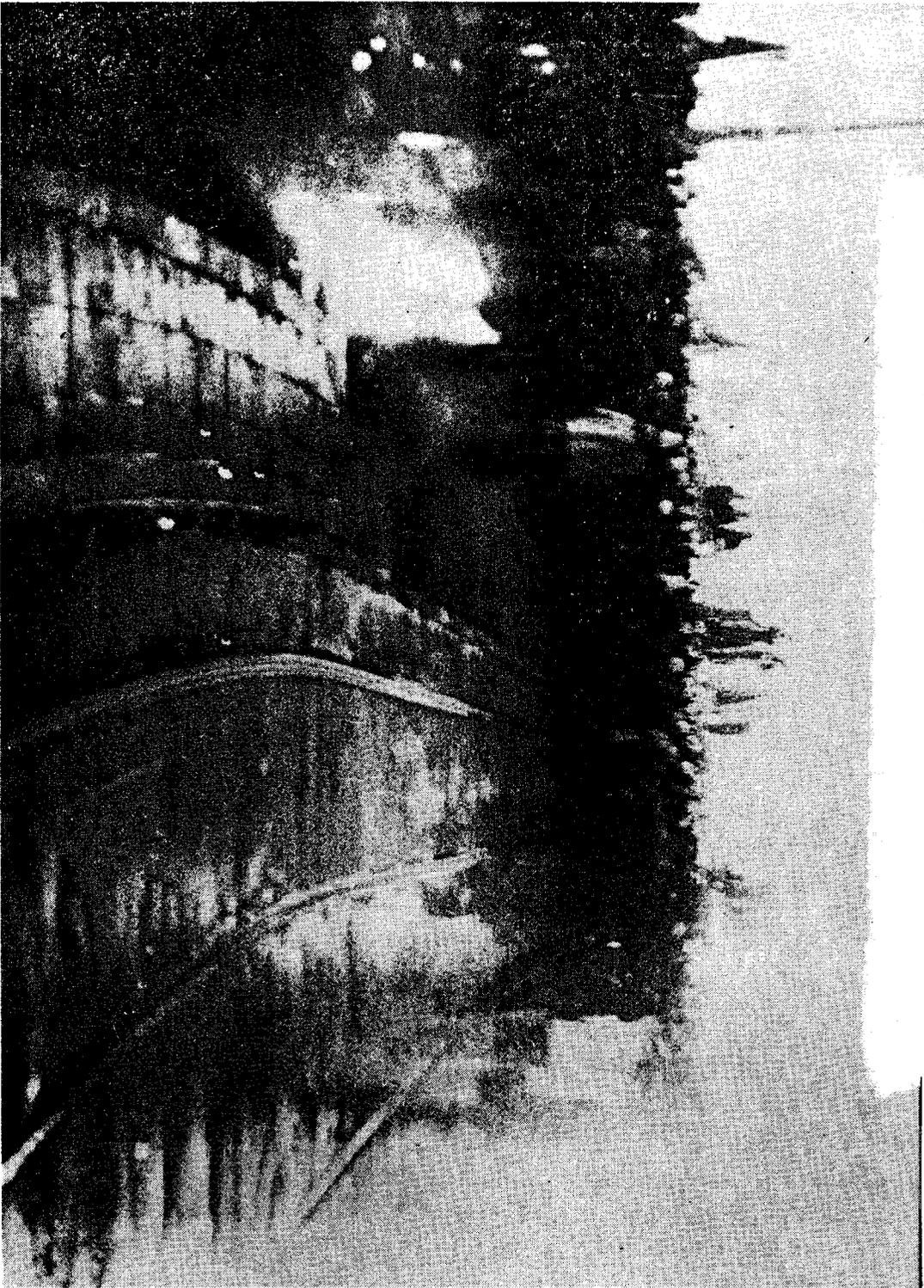
★ 自民党政府の侵略と
抑圧の攻撃に対決し
社会主義日本革命を
めざして闘おう！

★ 社会主義世界革命で
帝国主義と中ソのスターリン主義から
全世界労働者人民の
解放をかちとろう！

★ 腐敗した社共に代る
闘う労働者党をつくらう！

★ 議会主義に反対し
大衆闘争強化のために
闘う労働者の代表を国会へ！





前衛はどこにいる

か

梅本 克己

安保闘争のとき、前衛不在を叫び、そして自から前衛たろうとした人々、あるいは前衛党の創成を課題とした人々にとって今日の事態は切実な問題をつきつけているように思います。あるときは前衛不在を叫んでいけばよかった。それだけだったというではありませんが、とにかく前衛不在という言葉は、他者への抗議を含んだものとして、その抗議をぶつける相手がいたわけです。たとえそれがどんなにダランなものだったとしても、抗議をぶつける相手がいたということ、それを支えとして自分の存在を主張し得たということ、今はそのようなのはないということ、そのような「特権」はない、そのような位置に甘んずることはできない。前衛不在という言葉は、自分自身に向けて投げかけられなければならない。

実をいえば、ここからはじめて前衛創成の問題も出てくるのですが、今日の事態に立ち至っても、依然としてそこに付随しているといえれば、安保闘争時に、前衛不在を叫んだ勢力の両面性は、この数年間を通じて、ついにその根をほりかまされることもなかったということにならぬでしょう。ベトナムか日韓か、いずれが主役か、その論議にわけられてついに、「北爆」の翌日、アメリカ大使館へデモをかけたからといって、それでどうなら、それだけならマス・コミに乗っかる大衆演説主義ではないかとい、大問題でもない。われわれはデモなどはやらぬ、われわれの任務はデモなどでは解決できない問題にあるのだという立場から、困難な現状分析に入ったのだというにしても、それはそれでやはり為さるべきことは残ります。現に「北爆」が横行化されたのちに、デモもまた、横行化されようとしています。そしてすべてが横行化されてゆくなかで、帝國主義者はその野望をなかりありかまわず遂行しています。

この「横行化」こそ、かれらがねらいをつけたかれらの戦術です。だから、問題はこの横行化への皮切りをつけるか否かにあるのではありません。ベトナムか日韓か、今日における反戦闘争の意義如何、といった論議にわけられて、あるいはまた仲

問うちの反スターリニズム論議に熱中して、横行化への歯止めの第一着手をなすべき機会を逸してしまったということです。

この状況を、何んから前衛を志すものでもない一市民の行動と対照するとき、問題はさらに切実です。一人の市民が、胸にベトナム侵略への抗議の言葉を記して、一人で町を歩いたということ。その人はたぶん、一晩ねずみにベトナムか日韓かを考えぬいて歩いたのではないでしょう。また警視庁にデモ許可証を申請して歩いたのではないでしょう。天下の公道を一人で歩くのに許可の申請は無用です。その人は、自分以外のものとして前衛不在という非難を投げかけられなかったものでないでしょうか。いうならば自分にとっての前衛は自分なのだと、そう考えただけでは奇いでしょうか。民主主義とはかくの如きものではないかと考えます。

その市民に「道徳」しろとはいいません。しかしそれと肝をならべてゆくことすらできなかったとすれば、そしてデモといえは、何か自分たちがだれかを組織することだとか考えられなかったとすれば、前衛とは何んだらうかという問題がそこから出てきます。安保闘争のうちに、いろいろな分野で挫折といふことがいわれましたが、その挫折の中でも、とにかく市民主義が生み落した師子、あるとき見られなかった一人デモを生み出しています。この場合一人で歩いたか、二人ないし三人で歩いたか、ということは問題ではありません。そこにある理念の問題です。おれはおれの前衛になれるか。――私はわゆる「市民主義」ではありませんが、また前衛党無用主義ではありませんが、抗議の言葉を胸に記して、一人で町を歩いた一市民に敬意を表します。天下の公道を一人で歩くのに許可の申請は無用です。「何者に対しても」――いかなる教条に対しても――許可は無用であるということの意味を、今こそしっかりと追求して、そこから出発するときではないでしょうか。

――一九六五・五・一一――

(梅本 克己)

参議院議員選挙に際して

歴史は、いま全世界を戦後最大の激動のなかへ放りこもうとしている。世界資本主義の危機による帝国主義諸国間の対立の激化と、他方中ソ分裂の深化のなかで、日本資本主義は、日本とアジア人民への攻撃によって延命をはかっている。

こうした侵略と抑圧の攻撃にたいし、全国の労働者人民は、いたるところで反撃に立ち上がっている。そして、安保、三池から四・一七、原潜にいたる闘いのなかで、その腐敗ぶりをさらした社共両党をのりこえ、自民・民社と真向から対決し、自らの手で闘いをさらにひろくこうとする新たな努力が、いますべての職場で、学園で、地域で開始されている。

その先頭に立っている革命的左翼諸潮流も力強く結集し始めた。日本労働者人民の未来は、まさにこの力の発展にかかっている。六月の参院選挙は、こうした背景のもとでたたかわれている。それは、自民党とそれをささえる民社党に対決し、社会党、共産党の腐敗の滴りを決然とぬぐい去り、全国の労働者人民が、自らの主張を公然とかがけてたたかうべき、大きな政治闘争である。

われわれは、ここに社会主義労働者戦線を結成し、浜野哲夫を全国区統一候補として推し、新しい世界変革の息吹きを訴えてたたかぬことを決意した。戦闘的労働運動をきずくために

われわれの課題は、迫りくる反動の嵐に抗して、戦闘的労働運動を自らの手できずきあげることである。

激動する世界のなかで侵略と抑圧への道を歩む日本帝国主義の攻撃・日韓会談を粉砕し、原潜寄港を阻止すること、アメリカのベトナム侵略に反対し、これを助けつつ独自の進出をねらう佐藤内閣との闘いを強めること、いっさいの反動政策と反動イデオロギー攻撃に対決し、憲法改悪を阻止すること——これらは、われわれが果すべき第一の責務である。

さらに、あいつく物価値上げと、社会保障改悪を中心とする改悪政策に反対し、大幅賃上げをかちとること、合理化絶対反対の立場を貫き、増徴する労働災害に炎の増しみをこめ、心からの反響を加えること——こうした生活と生命を守る闘い、労働者階級の断固たる実力闘争をおしすすめるなければならない。社会主義労働者戦線は、なによりも全国の労働者人民が、共にこの闘いに決

起することを訴える。

きたるべき社会主義革命のために

こうした闘いの勝利のために、われわれは自らを一段と階級的に武装しなければならぬ。その方向を、はっきりと日本帝国主義の打倒・社会主義日本革命をめざすものとしなければならない。それは同時に、激動する世界にたいして、社会主義世界革命をもつてのぞむことでもなければならない。

ソ連・中国のスターリン主義者は、これまで長く「社会主義」、「共産主義」の名を偽りつつつけてきた。しかし、それは真の社会主義、共産主義とはまったく異なるものである。

われわれは、社会主義世界革命をもつて、帝国主義と中ソのスターリン主義から、全世界労働者人民の解放をめざしてたたかぬかねばならない。

この闘いの力強い前進のために、裏切りの歴史を重ね、黒い影を重くひきずる社共両党にかわって、闘う労働者階級の創成がいまこそ必要とされている。社会主義労働者戦線は、全国の革命的左翼潮流と闘う労働者諸君に、このための闘いへの決起をよびかけるものである。

革命的議会議場の立場に立つて

この主張のもとに社会主義労働者戦線は、浜野哲夫をおして、参議院選挙に参加する。

他のいっさいの政党と異り、われわれは、議会で労働者人民の利益が守られるとか、あるいは議席の数で社会主義が実現するかのような幻想を排除する。議会は資本家階級の支配の道具にすぎない。

われわれの利益を守る真の力は、労働者階級の団結と大衆闘争そのもののなかにある。われわれは議会議場を反対し、大衆闘争の前進のためにのみ、選挙闘争と議会を利用するものである。

社会主義労働者戦線は、とくに春闘・日韓を闘う全国の労働者諸君が、浜野哲夫とともに参議院選挙を闘いぬくことをここに訴える。

全国の戦闘的労働者諸君！

農民・市民・知識人・学生諸君！

社会主義労働者戦線のもとに結集し、参議院選挙をとみにたたかおう。

一九六五年 三月

新しい地点をめざして

革命的共産主義者同盟全国委員会

△ひろがる新しい胎動▽

四月二十六日、ベトナム侵略反対労働五万人のデモは、はげしい雨をついて昼夜連続して開かれた。連日の北爆に歯がみしながらも、行動を起せなかつた怒りが、この中でさまざまな形で噴出していった。米大使館めざして盛り込む学生部隊はもちろん、あらゆる単産、組合が、警備隊と衝突をくり返し、デモは道一杯にふくれ上った。五年前の安保の時、日共により、で銀座で行なわれた平和的「フランス・デモ」は、この日は怒りのスタラムの名に愛された。

もちろん、ベトナム侵略に対する、日本での闘いが、こんなものには止ってはいけなぬことは百も承知している。私達はそれを突破するために全力をあげて努力している。だが、デモは既成指導部のワクの中から、それをじりじりとつき破りつつある新しい力を示す一例として、私達に大きな確信を与えた。

日本労働運動の深部でこれまでの一切の慣例や体制に逆らひ、自分で行動を起そうとする活動が、さまざまな形でなわわれている。それは街頭デモにおいては

自発的なジグザグ・デモを習慣化しつつあり、職場においては、一般投票の要求や職場集会における幹部へのヤジ、あるいは組合事務所への集団での「ドナリ込み」のひん発となっている。これまで、言葉として言われていた「幹部不信」は行動となり、「アパッチ族」などといわれた特定の極少部分の行動は、職場の多くの人々の参加するものとなっている。

これらは、何ら明確な形をとって表れてはいない。ただ例えば警察と組合の宣伝カーの悲鳴をよそに大きく曲ったジグザグ・デモの先頭には、安保闘争以来その方向を変えなかつた多くの仲間が暗れやかな顔をしばしば見ることが出来る。それは、五年間の試練に耐え、脱落する者がすてに去った後に、新しい陣地を獲得し進みつつある日本反スターリン主義運動の今日の姿なのである。

だが、そのことよりも一層大切なことは、私達——革共同はもちろん、さまざまな反スターリン主義諸組織を全て含めたとしても——は、今日おこなっているこうした新しい大衆的胎動の、極く一部分にしかり位置していないことである。私

△現実の変動と意識の転換▽

現代世界の歴史的な変動が、私達に大きな力を加えていることはいうまでもあるまい。第二次大戦後二十年間、戦後世界を支配してきた帝国主義と中ソ、スターリン主義は、共に内部の亀裂を深め、その破たんを明らかにしている。アメリカ帝国主義の後退とベトナムやドミニカに対する狂気じみた侵略、フランス帝国主義に代表される失地回復の試みと帝国主義対立の深化、中ソ対立の激化と、平和共存とか反米中間地帯論に示される帝国主義との同盟の試み等々は、これまでの一切の世界観をうちくづくりに十分である。

長く「社会主義」「共産主義」の名

を偽り、世界人民を二つに引き裂き、中ソへの服従をもって革命に代えてきたスターリン主義者の宣伝はことごとく破たんしその根源である中ソの社会機構そのものへの批判が、鋭くつきつければじめられた。一九五六年ハンクウ革命で流された血の意味は、今ようやく全世界をとらえる鍵としてよみがえりつつある。

反スターリン主義運動は、抽象的立場でなく文字通り現実の世界変革の理論として、行動としてあるべき所に立たされていく。中ソの「共産主義」が、互いに自己がニセモノであることを暴露し合ったいま、反スターリン主義者は、これに止どめをさし、歴史を一步進める責任を負っている。

ベトナム侵略に対し、ソ連も中国も声明の投げ合いに終止している中で、全世界ではげしい反戦デモがまき起っている。国際会議による荒渡りでも、軍隊の投入による圧殺でもなく、ベトナム人民の闘いの現実の連帯の道として、それぞれの国における反戦反植民地闘争が展開されたことは、労働者の国際連帯の力強い復活である。この方向においてこそ、帝国主義の心臓アメリカにおいて黒人闘争と結合した本格的な階級闘争が進みはじめているのだ。反帝国主義・反スターリン主義の旗の下に、今こそ、新しい労働者の国際連帯の闘いをもち、現代世界の激動に立向うべき時なのであ

こうした世界における、矛盾の焦点の一つが、日本であることは明らかである。高度成長を誇った日本資本主義は、巨大な設備投資の圧力に自から動揺し、相次ぐ倒産や過当競争にあえいでいる。政界・財界の腐敗はその極に達し、吹原産業事件や東京都議会汚職など、底知れぬ腐り切ったウミは、その一端をのぞかせている。佐藤内閣は、一切の犠牲をアジアと日本の人民に転嫁し、この危機を脱すべく、攻撃を強めている。日韓会談の強行委縮、ベトナム侵略への協力をおしすすめ、ILO条約をテコに労働運動弾圧を強め、憲法改悪への準備を続けている。職場では、合理化の結果が、労働災害の激増となり、家庭でははてしない物価値上げや医療・水道等の混乱がおそいかり、生活と生命をおびやかす騒がれている。高度成長の「おこぼれ」にたよっていた従来の改良主義の指導や構造改革論は事実上前に破たんし、生活と生命を守る日々への闘いにおいても、真の階級の立場が必要とされているのである。

△ 新らしい課題にたえて▽

こうした一切の状況は、何よりも私達自身の視点と行動の大飛躍を迫っているといえる。もはや「異端」を語る時期ではない。社会党や共産党に対する不信がその内部からさえ広汎に生れている現

在、自から僅少の批判グループに限定していることは犯罪的であろう。私達は思想的グループから大衆的責任を果すものへ、批判者から日本労働者運動の主体へと脱皮しなければならぬ。そのために、選り好みしないことなく現実面に迫られている問題にたえること、新しい分野へ、それがどんなに不得手であっても進出することである。私達が、今回の参院選挙に取組むのも、こうした現実の運動の段階に応じた、政治組織としての責任においてである。三年前の参院選に、革命的左翼からの立候補とかわはじめての地点を切り拓いたにもかかわらず、それを運動総体の前進に生かすしかなかった自らの弱点にふまえて、今回は一層決意を新たにして取組むものである。

私達は、何よりも今回の選挙闘争を、先にのべた全国いたる所で始まっている新しい労働者の胎動に政治的表現を与え、これを力強い現実的政治潮流に結集するための場になりたいと思う。自民・民社と対決し、社共をのりこえて進もうとする無形の胎動にとって今最も必要なことは自からの存在と方向をはっきりと自覚し、大胆に政治潮流として自己を表現することだからである。選挙を、そういう場に運用することは、これまで社共の手で、常に選挙によって、日常の闘争を葬られてきたことへの痛烈な反撃となるだ

らう。

このためには、当然にも私達自身が、かかる胎動に結果を呼びかけるに足るだけのものに自己変革することを必要とする。私達はその第一歩を、社会主義労働者戦線の結成とその統一選挙の実践によってふみ出したいと思う。現在戦線に結集した共産主義者同盟、長崎造船社会主義研究会の諸君と固く連帯しつつ、一度は参加を拒否した人達をも含めて、さらに多くの人々がこの戦線に参加し、共に闘うようよびかけていくのである。これまでの現実と照らし、分裂を今日の課題と現実化させて整理し、それぞれの違いをむしろ鮮明にさせつつ、共通の目的への共同の行動を追求する中でその前進的解決を計っていく方法を、この中でつくり上げて行くのではないか。

彼は、ブルジョア議会議制度の本質にそって、これを彼等の階級支配に対する「国民の支持」としてえがきたそうと努めるであろう。民社党と公明党は、批判顔をしながら公明を助ける別働隊の地位を築き、社共両党は議会主義の面目をかけた議席の利益を主張してであろう。だが私達は、こうした議会主義者達のたわごとを一切拒否し、何よりもベトナム・日韓闘争の高揚と国際的連帯をもつてこれと対決するであろう。そしてこの中から今日の階級社会における支配者の殿堂である議会をうちたおし、人民自身の自治をうちたてることをめざし、将来を生みだしうる現実の力をつくりだしていくものである。日本人民の未来は、今日の広汎な闘争の労働者運動の胎動の中にこそあり、それは選挙においても当然反映されてしかるべきものである。私達は、わが同盟関西地方委員会副議長浜野哲夫が、社会主義労働者戦線代表として統一候補に選ばれた光栄ある責任を果すべく、全力あげて闘い抜くものである。

せまりくる世界危機を日本革命へ

共産主義者同盟

朝鮮戦争以降の資本主義世界経済の拡大を国際金融面から支えてきたドル・ポ

ンド体制の動揺、又同じくそれを産業面から支えてきたヨーロッパ諸国の重工業資本蓄積の一段落、この両者によって強制される帝国主義諸国の世界市場争奪戦の激化、これを背景とするこれら諸国の国際的勢力配置と国内階級協同体制の流動化、さらにはまた東南アジアにおける階級闘争の尖鋭化とそこに帝国主義諸国及び中ソ両国が深くまきこまれていること、これら一切の事情は、新たな世界危機・革命的危機の時代が、今や再び切迫しつつあることを示している。

他方、こうした中で、日本における最近の山陽特殊製鋼の破綻は日本資本主義の運命を予示している。山陽特殊製鋼を破綻に導いたすべての特徴を、全体としての日本資本主義自体が、共通にもっている。うたがいはなく日本こそは世界経済におけるその地位からいっても（固有の市場圏の欠如、全面的な対外依存性）最近十年間における急激な産業的拡大とそれと対照的なその国際金融面の異常な脆弱性から言っても、また支配階級の伝統的な無定見とその日暮しがら言っても、世界資本主義のその日陽特殊製鋼であり、その最も弱い環である。

日本資本主義の運命の道はアジアにおける階級闘争に反革命的に介入しつつ、自らの帝国主義的勢力圏を構築すると共に国際金融体制の動揺と世界市場争奪戦の激化から生ずるいっさいの犠牲と負担

を人民大衆の肩に強行的に転嫁する以外にはありえない。

それゆえ、日本における階級決戦は不可避である。そして、これこそが日本において資本主義がその社会主義的変革を歴史的に提起し日程にのぼせる現実の仕事なのである。

その国際的地位からして、日本における社会主義プロレタリアートの勝利は、アジアにおける階級闘争に革命的結着をつけ、中ソプロレタリアートをまきこむ世界革命的怒濤の時代を開始するであろう。まさにそれこそが、日本労働者階級の世界的任務である。

この世界史的任務を労働者階級の前に真正面から提起し、当面する諸闘争に巨大大な革命的勝利への展望を与えることによって、切迫しつつある革命的危機を勝利と社会主義的克服に導きうる日本革命の部隊、党を建設する任務こそ、我々共産主義者、日本左翼に課せられた世界的任務である。

危機の前夜における革命党建設——これをなしかるか、否かに、革命的勝利か敗北かがかかっている。第一次大戦後の戦後体制が崩壊した時、危機の焦点はドイツの総壊滅は、以降の世界史を根本的に左右した。だが、ドイツ共産党のファシズムに対する敗北は、危機の前夜（一九二六―二九）にすでに準備されていた。

二九年恐慌を境に、ナチスが共産党に数倍する拡大をなしたのは危機の前夜Ⅱ水運の繁栄期における組織的準備の差異の端的な結果であった。ファシズムに対するコミンテルンの戦術的誤謬以前に、世界的危機の切迫を察知しえずそれゆえに危機に対する総力を挙げた準備を欠いていた点こそ、一九三〇年代が、ファシズム反革命の勝利を許した最大の原因がある。

我々が、今、迫り来る危機の前夜に自ら革命主体として立ち、この国際プロレタリアートの痛苦に満ちた敗北の歴史を省りみる時、それらいっさいが、革命党の危機に対する立ち遅れに、つながっていることを心に刻まざるをえない。危機の前夜における革命党の建設——これこそ、革命の死活問題である。

我々、すべての社会主義を目指すものは、今、革命の死活問題の解決に真正面から全力を挙げてとりくまねばならぬ。

日本革命の勝利は、数々の日本労働者階級の先進部隊の結集を不可欠の条件としている。我々は、この課題を、こゝに、二年の中に果さねばならぬ。日本プロレタリアートが、世界革命の前衛として、その歴史的任務を遂行するための現時点の環は万をこす革命党の中核部隊の建設——そしてその中核部隊の公然たる党としての登場である。

我々は、来春までに、旧プロンドの水準を上回る数千の中心部隊を建設する必要がある。数千の打撃力をもって、日本社会全体を革命的に揺さぶること——これこそ、目下のところ日本の声、社革、統社間の流れに流れている膨大な戦闘的独立グループを、切迫する世界危機とその焦点としての日本へ、について覚醒せしめ、我々の戦列に総結集していく道である。

この総結集した部隊をもって、我々は、断固たる日本共産党の革命的解体に向け、奮進するのだ。日本革命の勝利は十万人の日共に真向から対決しうる部隊なくしてはありえない。又、革命的危機に至る激動の過程において、日本共産党を革命的に解体せしめ、日共内独立派、戦闘グループを我々の革命党に合体吸収していくことを万の党を、数々の勢力に拡充していく唯一の道であろう。

我々共産主義者同盟は、日本革命の勝利を獲得し、世界革命の前衛たりうる革命党の中核部隊として自らを殺さるべく、全生命力を傾けて闘ってきた。だがその任務Ⅱ方をこす革命党建設の中核部隊としての任務は、ひとり我々だけのものではない。安保闘争を旧プロンドと共に闘い、世界に比類のない戦闘的マルクス主義を堅持し、その後も労働運動、学生運動のあらゆる分野で、日夜不屈の奮闘を続けているすべての革命的左翼、戦闘的左翼の共通の任務である。我々は、旧

夫 哲 野 浜

ルと呼ばれる青春の一時期をもったわれわれは、その後、「戦争責任」を「戦後責任」追及の課題からとらえ直す視点にも触発されながら、自らの立ち場を定めてきた。そのわれわれも又問われている。いや、われわれも許されない。一人一人の「私」が、ベトナムの現実に対して何をなしているかの問いは、自らの存在をかけて答えなければならぬ。そのような問いであるが故に、ベトナム問題に対する姿勢は優れて党派的な分水嶺をもなすのである。

「野坂を当選させることこそベトナムへの連帯」というオルグを私は憎む。「どうせ日共のいうことだから……」と嘲って済ますことはできない。確かに反スターリン主義者は、「もし日共がほんとうに前衛党であるならば……」という仮説に立って、それをなしていない、日共を弾劾する立場を否定する。「スターリン主義の必然」としてとらえるからだ。だがその明快な論理と共に、ことあたらしく憤りを禁じ得ないのだ。

この余りに愚劣な日共と決別したからといって、それ自体ではなんら主体的な責任の証拠とはならないことは当然である。「戦争」の問題が、抽象的な課題ではなく、現に今、この東南アジアの一角に拡がっているという現実が、アメリカ帝国主義とその取すべき加担者、日本帝国主義への徹底的な抗議闘争・反戦闘争の展開のために全力をつくすという単純な実践的回答以外には何も無い。

選挙のためのアジ・ネタとしての「ベトナム問題」を否定する。「ベトナム問題」の真の解決が、ベトナム人民の抵抗、反植民地闘争に連帯する国際的、なかになく、アメリカと日本における反戦闘争こそ決定的であることを実践的に明かすに選挙を、その余りにオーストリア的な革命的議会主義をただひたすらわれわれは闘う。

世界中に存在するすべての思想と党派が、クワワを並べている日本の現実とはまた違った困難をもつアメリカ、「アメリカ的民主主義」の名ではよばれる異様な充実と空白の錯乱した世界ともみえるアメリカにおいて、ベトナム戦争に反対する闘いは湧きおこらずにはいかなかった。アメリカの学生運動は、「長い眠りから覚めた」ことを、「沈滞の時期の終った」ことを高らかに宣言した。

世界の反戦闘争に呼応して、日本の労働者人民も闘いに立ち上った。無難丸労働者の英雄的な闘いは「戦争に反対する」とはいかなる実践的行動をとることなのかを、先駆的に示した。無難丸の労働者は、「武器を運ぶこと」は、日本の労働者がベトナム戦争に加担することになるから……とハッキリといっている。あの感動的な闘いを簡単な新聞報道で読んだとき、私はなんの事実上の根拠もないのだけれど、原水禁運動や、「平和を守る」署名運動などには関係のない人々であったような気がしてならなかった。

四月二十六日、アメリカ大使館への抗議闘争を闘った五万の労働者、学生は、手に手に「反戦」「ベトナム戦争反対」のプラカードを掲げていた。われわれをとりまく客観情勢は、「戦争と平和」にかかわる労働者人民の意識の方位を大きく変えている。第二次世界大戦以降、十数年つづいた帝国主義列強の犠牲的繁栄と日本帝国主義の相対的安定を背景に繰り返されてきた「平和を守れ」式の現状肯定的な運動はいまようやく現状肯定的な「反戦闘争」へと、その様相を大きく変え始めています。その大衆的な次元での大きな流れの変化は、「反戦闘争」の旗をかかげて一貫して闘ってきたわれわれの任務を、層重要なものとしている。

四月二十六日の闘いは最初の闘いにすぎない。そのより質的な拡大強化の積み重ねなしには、ほんとうに戦争を阻止することなど思いもよらないのである。だがともかくも一歩はふみ出された。あれいらい職場の労働者のベトナム問題に対する態度は一つの変化を示している。日本において巨大な大衆的闘争がまだ組織されなかった段階では、戦闘的労働者が社共認指導部の日和見を弾劾しながら、分会、支部段階で「ベトナムに対するアメリカ帝国主義の侵略反対」の決議をかちとり、独自にアメリカ大使館へ抗議にできていて闘って開いた段階では、多くの大衆の中に「中国義勇軍」への期待と反発の奇妙な共存があった。「アメリカ帝国主義のベトナム侵略反対！」という余りに明白な価値規範が大衆的に存在するにもかかわらず、その行動をいかに組織するかを公認指導部が放棄していた結果、自分の行動の外に問題の解決をみようと思えるを得なかつたし、そのことが「中国義勇軍声明」への一種の期待となっていた。だがしかし、もしほんとうに中国義勇軍が参加したならば、世界戦争になるのではないかという危惧が、同時に強烈に存在した。

労働者はあつていくベトナムの青年に担担することを出発点としている。限りもなく貴重な一人一人の生命が、しかも大量に殺されてゆくという現実に向かうから反対することが常に大衆的な反戦闘争の出発点であるが故に、世界戦争の可能性をほらむ事態は反対されざるを得ない。その混雑は、「ベトナム戦争」の兵兇部である日本の地において、断固たる闘いを組織されることになって始めて一つの確信へ、主体的な問題の解決へとその一歩をすすめることができた。その闘いをおしすすめることは、「五億の人間の半分が死んでも、残りの半分で社会主義を建設する」という毛沢東の思想が、共産主義や、労働者階級とは何の

関係もないものであるどころか、帝国主義と共に打倒の対象とならざるを得ないものであることが把握されていかざるを得ない。職場の労働者は、中国義勇軍問題にはなく、自らの闘いの方向について語り始めている。

帝国主義とスターリン主義が相互に对立することを通じて補完しあっている関係の、醜態な破綻地点であるベトナムの問題は、国家と国家の対立ではなく、国家に対する労働者人民の闘いという軸を、大衆的なものとせざるを得ない。

いつか、森秀人氏が「私の内なるベトナムよ」と痛切に書いていた。又、先日おとすれた大正の退職者同盟では、谷川雁氏の評論エッセイにでてくる秀才の名人が、小林寺拳法と、僧兵としての弁慶と、ベトナムで機身自殺する僧と、ベトナムとが幾層にも重なりあつて彼の内部に存在する興味深い話を聞かしてもらった。確かに空疎なスローガン化しやしない闘いの現実を、その内部との対応関係で深化させることはきわめて重要なことであるし、ベトナムの問題が生活化された次元に定着することは大切である。

だが私は、いまや、「私の内なるベトナム」をハッキリとふまえつつも、十七度線上に横たわるベトナム、外なるベトナムの問題にかかわることを通じて、「ベトナムの内なる私」へと転化し、その場所的闘いとして日本の中に、インターナショナルな反戦闘争を展開することを急務であると考え。きわめて正当な論理を貫徹することが殊更に重要であると考え。

安保闘争の大衆的高揚と、その中での日共の裏切りはスターリン主義の反労働者性を赤裸々にあばきだした。日共の権威から自らを解放した人々は、各々の地

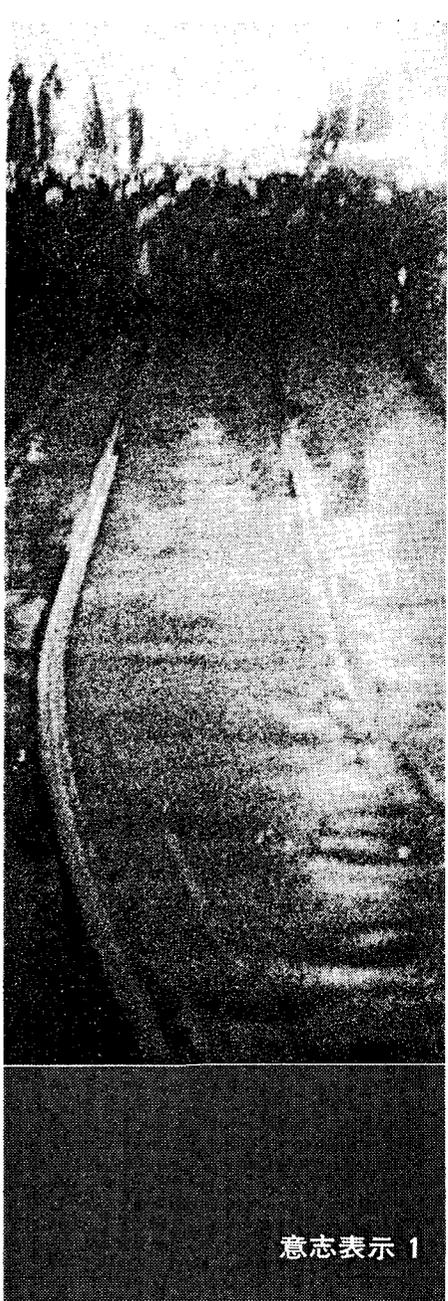
点、ジャンルの中で自らの問題意識の深化を闘い通じていった。あれから五年、世界と日本の階級情勢はいま大きな一つの転換点を迎えて世界。歴史の転形期が常につきつづける政治的課題を軸として再編される新たな見取図が提出されなければならない。われわれの参議院選挙闘争がそのための一助となれば幸いである。

ベトナムの問題だけではなく、急迫をつげる日韓会談、昨春闘から今春闘へかけて生活を守るために立ち上った日本の労働者階級の闘いは、次のことをわれわれに要求する。

まずまず激化するブルジョアジーの攻撃と、そのまに一切の展望を見失なつて指導を放棄する社共認指導部の姿がますます広はる労働者の中に明きらかになつてきたこと。革命的左翼の思想的・組織的影響の外にも、公認指導部を乗り越えて闘おうとする戦闘的労働者が公然と存在すること。この事実を逆に革命的左翼が公然と一コの密集した部隊として歴史の上に登場することを是が非でも自らの課題として追求することを要求している。その課題に答えるためにわれわれは参議院選挙を革命的に闘い抜く。

議会主義的な一切の党が、ベトナム、日韓の大衆闘争の高揚の中で連帯を運ぶのを怖れるのに対して、革命的議会主義の立場に立つわれわれのみが心からこれを歓迎する。ベトナムで殺されていく青年を何故助けられないのかという小学生の問いに答える選挙戦の先頭に立つて私は闘い抜く覚悟です。

(社会主義労働者職代表)



意志表示 1

私の意見表明

中島嶺雄

ベトナム戦争というよりも、ベトナムの土をいまでも、血に染めている一個一個の殺戮行為は、われわれが核均衡のゆえに世界戦争を回避し得ているとしても、それだけではどんな意味ももたらさないことを歴史の内面から告発している。そして、この告発にたいして日本人が真に答える道は、たんなる平和への願いやベトナム

ンへの同情ですまされるものではなからう。あたりまえのこととはいえ、ベトナムの殺戮が示す歴史の重みを真底からはねかえす力を、われわれ自身が組織し、つかみとることなくてはならない。

こうした現実を直面しつつわれわれの周囲を見つめるとき、私は恐れをも伴う怒りを感じる。民族主義の呪縛にとりつかれたわが国の官許マルクス主義は、反米民族闘争を主張したとしても、今日の後進諸国における民族解放闘争を現実的に支援すべき方向、つまり労働者階級の国際的連帯闘争の次元に自己を安置しようとは決してしない。アメリカのベトナム侵略という明瞭なる事実を目前にして、中国共産党の論調は一きわざ高鳴いものに見えるが、では、中間地帯論を理論的基礎にもつ中国の主張は正当であろうか。アメリカ帝国主義の暴虐が極まれば極まる程、それ自身、中国革命の特殊な体験に導かれた都市包囲の根拠地革命方

式とスターリン的「連鎖の弱い環」＝毛沢東的「矛盾の結節点」という思考方法によって成形される中間地帯論は、後進諸国の民族解放闘争と先進諸国の労働者階級の闘争および国際的平和運動との相互認識・相互協力の弁証法的浸透関係を完全に無力化するものであるといわねばならない。事実、ベトナムでの事態はいまやベトナム戦争を遂行しようとする根本命脈をその中核において打破するという展望なしには、そしてわれわれにとってはベトナム戦争に現実に加担しつつある日本帝国主義との闘争を媒介しないかぎり、事態への本質的対決を回避することになるであろうことを示唆している。この意味で去る四月一七日、ついにアメリカ国内でも学生・知識人を中心とする二五〇〇〇名のデモ隊がホワイトハウスを包囲したという事実は、画期的な歴史的意義をもつであろう。今日、全世界にベトナム戦争反対の意識が高揚しつつあることは

人民の連帯的抵抗権が不屈であることを示しているのであって、いまこそ国境を越えてそれを結合しなければならぬ。だが同時に「ナショナルイズムの季節」を忘却の彼方に追いやるインタナショナルイズムの回復は、われわれ自身の反政府闘争を実際に媒介しないかぎり、それは永遠に高邁な理念にとどまるだけであろう。だとすれば、安保闘争以来、前衛の不在や反体制運動の思想的不毛化がしばしば語られ指摘されながら、そしてこのことが自覚的部分の常識とさええないながら、新しい左翼諸潮流が今日においてもなお、有効な闘争を組織し得ていない事実をどうすればよいのか。いまやプロレタリアートという言葉自身もその古典的意味での実体感をもたなくなっているかのような状況がびまんするなかで、マルクス主義の根本的課題にたいする問いかけを恒常的に深化せしめることはどのようにして可能か。

社会主義労働者戦線がこれらの課題へのアタチュアルな対決を果そうとしている戦闘的部分であることを「前進」の紙面を通じて感じられるからこそ、私はここに意見表明の依頼をおききうけた次第である。この点で私の注目をひくのは、今回の社会主義労働者戦線の結成が、それぞれの部署で現実の課題に取り組んでいる自覚的労働者の共同行動の一環としての全国労働活動家集会への積極的参加を経て達成されたことである。従って社会主義労働者戦線が提起している課題への取組みは参院選挙という虚構をこえてこそ持続すべきである。

最後に、社会主義労働者戦線の申核が、かつて安保闘争とともにたたかた戦後世代であることは私にとって大きな意味をもつ。なぜなら、われわれはいまや世代論的特権を超克し得る思想と行動の基点を大胆に提起し、社会の内面に植えつけてゆくべき時期に到達していると考えられるからである。私はなおいくつかの点

で社会主義労働者戦線と見解を異にするであろうが、私の意見表明は、そのための共同のケルンとともに構築してゆこうという意志の表現にほかならない。

(一九六五・五・八)

スローガンのことなど

大島 渚

去年韓国へ行って、韓国の学生たちの政治闘争の巧みに舌をまいた。いや、巧みさ、などと語ってはいいないかも知れない。もっとも困難な状況に置かれたものが、それゆえに身につける智慧と云おうか。

たとえばスローガンの問題。我が日本に於いてはスローガンは正しく単なるスローガンであって、それはいわばどこからも文句の出ないことを最大の眼目とした合言葉にすぎず、言ってみれば「有楽町で会いましょう」と言うのと大差はない。どこからも文句も出ないかも知れないが、それによって敵を傷つけもせず、味方を奮起させることもない、まあテレビコマーシャル程度のもとなり果している。

韓国の学生たちの場合は異なる。彼らにとってはある時期、あるスローガンをかかげることは、その時、そのスローガンのもとに、どれだけの人間を集め、どれだけの行動を起し、どれだけの打撃を敵に与え、どれだけの犠牲を覚悟するというように、スローガンに対応する全く具体的な行動を持っているということ

意味するのである。したがって、ある時期にどのスローガンをえらぶかということとは、彼等の運動にとって、正に死活の問題なのである。//反日//とどめるか、//反政府、政府打倒//まで押し出すか、あるいは//反米//までふみ切るか。一つ一つの闘争のプログラムのなかで、それらは慎重に用意され、大胆にかげられる。それ故に、それは民衆を立ち上らせる力を持っている。スローガンとは本来そうしたものではないだろうか。そのスローガンの下に、人々をして銃火の下をくぐらせることのできるもの。それ以外はすべて、CMにすぎない。

ベトナムについて、日本の革新政党、民主団体と称するものがかかげているスローガンも、またスローガンの名に備するものではない。何らの具体的方針をふくまぬスローガンはスローガンではない。むしろ「ベトナムに平和を」などと唱えておきさえすれば、ベトナムに対する責任が果たしたと思わたりするかも知れないだけ、有害である。これでは、まるで念仏ではないか。

私はベトナムへ行って来たが、ベトナムについてはもはやルポルターージュの時はずいぶん、政治的行動の時であると思う。岡村氏や開高氏や毎日新聞のルポルターージュは一部で難くせをつけられているらしいが、私は立派なものだと思ふ。少くともこれを読めばベトナムについて全て判る。必要にして十分である。あとは、ベトナムについて何をすればよいか各人が考えればよいのだ。それについてまだルポの筆者に要求するのはお門違いである。それは要求するとしたら、政治家・政党に向ってすればよいのだ。

今日、日本の政治家、政党のうち、どれがベトナムについて、真にスローガンの名に備するスローガンをかかげ、真に民衆を立ち上らせることができるか。お手並み拝見である。

ただ、一言、これまでのルポルターージュにつけ加えておきたい。それは、ベトナムが日本に期待するというのは、いささか嘘である。筆者の日本の民衆に対してベトナムに関心を持ってくれるようにという願望の表現であろう、ということである。むしろ、ベトナムでは、日本はアメリカの共犯と見られている。日本が出兵するという記事が新聞にデカデカと出たくらいなのである。それでよいならよし。それが厭なら我々は何かせねばならない。何か。具体的に。行動として。

（秋田憲憲）

期待 林光

今年のメーデーにあたり、さる芸術家のグループはジグザグ・デモをやらないという申しあわせをしたそう。ところどころわづらジグザグをやるのが良いとは言わぬが、ジグザグをやることかやらないとか、あらかじめ決めるなど、愚劣を通りこしてアホくさい気がする。腹の底から湧きあがる怒りを抑え切れなくなつたとき、ぼくたちはそれを、状況に応じて例えばジグザグ・デモとして表現するのであって、スケジュールにしたがつたジグザグ・デモなど、ジグザグの名に値しない。

まるで、ジャズ奏者が、ソロパートを前の晩に譜に書いておくようなものだ。

その場になってみなければ判らないではないか！

し、彼等、がいつも非難する「公正なジャーナリスト」の精神と「マッカーサー憲法」の精神を武器として、それをやつた。

大島渚は、白衣の勇士の募金という、進歩的ジャーナリズムが逃げて通るような対象を素材として、日本から一歩も出ないで日韓問題をみごとにとらえて、ぼくたちに近づけた。

マルクス主義やレーニン主義や毛沢東主義で武装している彼等、に、岡村や大島の十分の一の仕事でも良い、やつてもらいたいと期待するのは無理なことだろうか。

アメリカはベトナムから手をひけ！ アメリカはドミニカから手をひけ！ まったく異議はない。だがその方法は、まさか参議院選挙に何人あるいは何人の代表を当選させること、ではあるまい。もちろんそれが必要なことだ。

ベトナムを侵略しているアメリカの軍隊は、オキナワを含めて、日本を基地としてそこら出動し、日本で訓練をうけ、また日本を中継して送られていく。それは、五年前にアメリカ政府が日本政府と結んだ安保条約にさえ違反しているのだから、ぼくたちはまず日本政府をうごかし、必要とあれば政府をとりかえて、アメリカ政府に侵略を思い止まらせねばならない。だが、侵略軍を送り込んでくるのはアメリカだし、アメリカと日本との力関係は平等ではない以上、アメリカそのものを強くゆすぶらなくてはだめだろう。アメリカをゆすぶる、アメリカの政策をかえさせるくらいは強い力は、アメリカの人民以外にないだろう。日本はアメリカの裏庭のようなものだと、偉いアメリカ人が言ったそう。じまになる話ではないが、そこにいくらかの真実があるとすれば、良くも悪くもそれだけ密接な関係にあるぼくたちのスローガンは、こんなにちたたいま、なによりも、「アメリカ人民との連帯」で

闘争にスケジュールなど必要ないと言っているのではない。かわりつつある状況を見きわめ、それに対して鏡どく反応し得ないスケジュールなど、意味がないことだ。

こんなち、ぼくたちが、致ある政治組織その他におおむね絶望せざるを得ないのは、彼等が、ぼくたちの、表面上ではなく、心の底に直接よびかけている、さまざまの矛盾をはらんだ願望に直接よびかけてくれないからだと思ふ。つまり反応がにぶいのだ。

さいきん、必要があつて古い雑誌をひっくりかえしていたら、朝鮮戦争の頃の雑誌「平和」がでてきた。表紙にナバーム弾で顔を焼かれた朝鮮の子供の写真がのつていた。

アメリカ帝国主義のやることもかわらないが、それ以上に、彼等の発想が今も昔もいっこうにかわっていないことを、あらためて知つた。

北は天国南は地獄 東（ひがし）進歩で西（にし）反動。

これが彼等のパターンであり、すべてのスケジュールが、ここから生れる。ここからしか生れない。

ところが、ぼくたちは人間だし、日本みたいに、やたらとカネの出入りがはげしくなつて、そのなかで精神がもみくちゃにされている間に住んでいられる、ものごとは簡単に割り切れない。とにかく平和がいいばんだと言われれば、そうだなと思ひながら半分くらいは疑っているし、いのちよりも自由がだいじだと言われれば、それもそうだと言いながら死んじや意味ねえと腹の中で考える。

七年前、ベキンで言われた。あなたたち日本の芸術家が、ほんとうにみじめな状態におかれて、その中ではがんに病んでいることに、心から同情する。ぼくたちはその時、まずなんと思つたか。おれたちそんなにみじめかな、そんなことねえな、である。ベキンの友人が

はないのだろうか。

彼等の口から、そのことをいってんもきいたことは無い、とは言わない。が、ヤンキー・ゴ・ホーム！の洪水の中にかくれてほんの少ししかきこえてこなかったことは事実だ。そして、あえて言わせてもらうならば、その声は少ないだけではなくて、愛情が感じられなかった。こんなふうになつて、それこそ、ライシヤワワーの手先ときめつけられるだろうが、まあもう少しきいてほしい。

ついさつき、良くも悪くも密接な関係、とぼくは書いた。アメリカとぼくたちとの関係はそれ以外ではあり得ない。二〇年間、アメリカは日本を経済的にも文化的にも、いわゆる「植民地」化した。だが同時に、天皇制絶対主義のなかで一種の文明的な原始人だったぼくたちを広い世界につれ出したのもアメリカ人だったのではないか。だから、ヨーロッパ人も、またAA精神の筋金入りのアジア人も、ちがった関係でアメリカ人とぼくたちとは結ばれている。折目正しいヨーロッパ音楽を平気でけとばして、自由で肉体的なジャズを創造したアメリカ人、右手にナイフ左手にフォークという「マナー」を笑ひとばして、右手にフォークという人間の本能に素直にしたがつた食へかたで食べるアメリカ人。もちろん、その素直さ、その気軽さが一定の条件のもとで、野獣のような帝国主義的軍隊をたちまちつくりあげる可能性に通ずることは判っている。それを承知であえて言いたい。愛情あふれる連帯意識があつてこそ、そのアメリカ人たちをかりたててアメリカ帝国主義をほげしくくみ、それとたたかうことができるのではないのか。

彼等、は言うかも知れない。なにもアメリカ人民の手をかりなかつたついでに、ベトナム人民は自力でアメリカを追い出す。だが、そのいづれまでのあいだに、やはり多せいの人が死ぬのだし、南の挑発はいつ中ソ

うそを言ったわけではあるまい。だからよけいに困るのだ。結局はうそか本当かどちらかしかない、敵か味方かどちらかしかない、役に立つ芸術か敵か手をかす芸術かどちらかしかない、という発想では、ぼくたちはたががれない。

ベキンのことはまあ良い。友情のうちなんだらうから。だが、日本の彼等がそれでは困る。

北は天国南は地獄。北ではこんなに豊かだ。腹いっぱい食つてる。南はこんなにみじめだ。みんな腹をへらしている。だが、日本は北がそれだから南もなり。ちやんと食つてる。ちやんと食つてはいない、といわれるかもしれないが、とにかく食つてるといって良いだろう。そして曲りなりにも食つているとき、その食いかたがちやんとしていないことを認識させるには、もはや食う、話だけでは無理なのではないか。

南は地獄、ということになる。その政府はダメな政府、人民は——まさかダメではないにしてもみじめな人民、ということになるのだろうか。

彼等の善意をうたがいたくはないが、北の共相国の天国みたいな情景を大カンゲキで紹介する労力の半分ではないから、南の反動政府のもとの、人民たちの苦（に）が、いびい、ほこりにまみれたたかいたをぼくたちに知らせるために費してほしいと思う。

いつだったか、韓国の学生デモの報道写真で、警官に引きたたられている高校生らしき男の子の腰に、その母親らしい白衣の老婆がみついて必死に取りもどそうとしている情景を見て、深い感銘をうけた。すくなくとも今のところは、「千里馬（チヨソリマ）」の大打進や、慈父の如きホーおじさんの肖像よりも、この汗と涙によごれた韓国の母子の姿のほうが、はるかに強くぼくたちにうたえたえかけ、ぼくたちをふるい立たせるのだ。

岡村昭彦は、アメリカ帝国主義の軍隊と行動を共に

の介人をさし出さないでもない。そうならば第二の朝鮮戦争になる。それは「正義の戦争」かも知れないし、不正義の平和よりはましかも知れない。だが、正義の平和はもっと良いのだ。それに、ベトナムの平和に手をかすことはアメリカ人民のためにも良いことなのでないだろうか。そこから、アメリカ人民自身の解放のために役立つなにかをまなぶだろうから。

アメリカ大使館にはげしいデモを、アメリカの軍事基地にはげしいデモを、だが、街でアメリカ人をみかけたら、ヤンキー・ゴ・ホームを叫ぶかわりに片言のアメリカ語で連帯へのよびかけを、

平和のためのデモンストレーションとサポーターとストライキを、アメリカ人民と共に！

陽気なジャズで平和の歌を、

こんなち、なによりもまずこうよびかけてくれる組織があれば、ぼくはその組織を支持したい。

一九六五・五・一一

（秋田憲憲）

ベトナム問題への視角 対馬忠行

マルクス主義者は民族主義者ではない。被抑圧国の民族独立を支持し、民族的抑圧に反対するものではあるが、しかし、一切の民族運動をプロレタリア的・国

際主義的・階級闘争の利害に従属せしめる階級闘争第一主義者である「ブルジョア」は、いつも前舞台にかかげる。プロレタリアートにとっては、民族的要求は階級闘争の利益に從属する。「プロレタリアートは、労働者の階級闘争の視角から、一切の民族的要求一切の民族的分離を評価しつづ、あらゆる民族のプロレタリアの同盟を最も高く評価し、もっとも重視する。」「レーニン「民族自決権について」」「民族自決をも含めた民主主義の個々の要求は、絶対的なものではなくて、一般民主主義的な(今日では一般社会主義的な)世界的運動の小部分である。個々の具体的な場合には、部分が全体に矛盾することがありうる。そのときには、その部分を否認しなければならぬ。」「(レーニン「自決に關する討論の決算」)

そういうわけだから、マルクス・エンゲルスは、ある民族の独立運動、たとえば、ポーランドやアイルランドの民族運動を支持したにもかかわらず、ある時期の民族運動、たとえば一八四八一四九年革命当時におけるチェコ人及び南スラブ人の民族運動には反対したのである。けれど、前者の運動がプロレタリアートの世界的闘争に前進的意義をもったのに反し、後者は、十九世紀國際的運動の支柱たるロシア・ツァーリズムの階級的役割を演じていたからである。当時、チェコ人とクロアチア人は、その独立闘争においてロシア・ツァーリズムにたより、かくして「ツァーリズムの前哨」として、オーストリアにおける反革命的勝利をたすけたのである。これはレーニンも述べていることだが、前世紀、ロシア・ツァーリズムやフランス・ボナパルチスト(ナポレオン三世)は、しばしば小民族運動を利用し、ヨーロッパの民主主義に對抗したのである。(エンゲルス「革命及び反革命」第八章九章参照)さて、「社会主義労働者戦線参院選挙スローガン」

戦中戦後挽歌

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★
佐野美津男

ぼくの生まれた街には職人ばかりが住んでいて、どこかの家でも夜おそくまで灯がともり、生活の音が絶えなかった。ぼくの親父は腕ききの洋服屋で、ミシン踏みの巧いことといったら——そのリズムカナルひびきを子守唄にぼくは大きくなったようなものだ。小学校へ行く道にもたくさん

のうちは、「ベトナム侵略反対」の要求があると共に、「社会主義世界革命で、帝国主義と中ソのスターリン主義から全世界労働者人民の解放をかちとろう」というスローガンもかけられている。もちろん私も異議ないところだが、ただ、ねがわくば、両者がバラバラに分離されることなく、ベトナム問題に關しても、後者の戦略的要求がシッカリとつらぬかれてほしいと、ということである。両者は強力に結びつかなければならぬ。

わかれれば、むろんアメリカ帝国主義のベトナム侵略には反対しなければならぬ。しかし、かつて、前世紀に、「ボナパルチズムもツァーリズムも、自分の利益のために、ヨーロッパの民主主義をむこうにまわして小民族運動を利用した」ように、今日、スターリニストは、自分の利益のために種々の民族運動を利用して、われわれは、一方、アメリカのベトナム侵略に反対すると共に、他方、ベトナムの民族闘争に対しては例え、「スターリニストに利用されるな」、「スターリニストの道具になるな」というような警告を含む批判的支持をもって、それを支持しなければならぬ。

けれど、スターリニストの利用のままにまかせておくならば、世界社会主義革命の道をふさぐことになるからである。「後進国の真に共産主義的、革命的でない解放的潮流を、共産主義の色彩に偽装することに対して、断乎として闘争しなければならぬ。コミンテルンは、植民地及び後進諸国における革命運動を支持する義務があるが、そうすることの唯一のねらいは、すべての後進国における、単に名前だけの共産主義的のものでない将来のプロレタリア党の諸分子を結集させ、教育して彼らの民族内部のブルジョア民主主義運動に對して闘

争すべき、特別の任務を自覚させるところにある。」「(コミンテルン「民族・植民地問題テーゼ」)「植民地革命の第一歩は、……外国資本主義の打倒にむけられるであろう。けれども、最も重要かつ必要な任務は、農民と労働者の共産主義的諸組織をつくり、それを革命に、ソビエト共和国の樹立に導いて行くことである。このようにして後進諸国の人民大衆は、資本主義の発展を通じてではなく、階級意識の発展によって、先進諸国の自覚したプロレタリアートの指導のもとに、共産主義と結合されるであろう。(同補足テーゼ)かつて、コミンテルンは、「植民地革命の指導権は、ブルジョア民主主義者の手中にあってはならぬ」とさげんだったが、今日では、更に、「スターリニスト及びそのアジヤ的変種たる毛沢東主義者の手中にも……」といわねばならぬ。その手中にあるならば、決して、コミンテルンの主張のように、世界社会主義革命の力となり、共産主義的前途をもつことができぬからである。

ベトナム問題において、一切のスターリニスト、社会主義者、小ブル平和主義者、民族主義者と異なり、ねがわくば、「反帝・反スタ」戦略の精神がつかぬかれんことを願う。レーニンは、マルクスの理論は、決して民族運動を無視しなかったが、しかし、「労働階級が民族問題を物神化する」ことは、もっともいけないことだ」といった。ねがわくば、ベトナム問題に關しても、反スタ・マルクス主義的階級闘争の視角から把握され、対処されんことを望む。(経済学者)

1

ぼくの生まれた街には職人ばかりが住んでいて、どこかの家でも夜おそくまで灯がともり、生活の音が絶えなかった。ぼくの親父は腕ききの洋服屋で、ミシン踏みの巧いこととい

のうちは、歌のようなことをつぶやいて活字を拾っていたキミちゃんの父さんは、いつもマツチ樺を妻楊子のようによくわえていた。そしてときどき、ものすごい音をたて、活字の箱をぶちまけるのだ。

かき生い繁り、わずかにぼくら人間ともを励ましてくれたものだった。そしてその励ましに應えるようにぼつんぼつんと焼跡のあちこちに人間たちの小屋が建ち、ぼそぼそと炊事の煙をあげ始めた。

したくねえんだよ。だから電球売りをしてるんだ。ねえ、これでき、うちのなかを、明るくしておくれよ——なんてことをいながら、ぼくらは二、三人で組になり焼け残りの街を歩き回った。

小学校へ行く道にもたくさん

いまも耳をすませば、たぐきんの音がきこえてくる。二十年も前に灰になってしまったあの街の音がきこえてくる。生活が続いているから音は絶えないのか。だれもかれもが消息不明のままなのに、音だけがぼくの耳を敲き、あの街をなつかしからせる。

ぼくひとりではない。その小屋には、ぼくと同じ年頃のやつらが、それぞれ魚市場のマグロのようにごろごろころがっている。

一度行った街へ二度とは行かない。なにしろインキ電球だ。それでもときどき、仲間の回った街へ、知らずに行ってしまったことがある。嗚鳴られ、撲られ、あげくの果ては警察だ。そこでもまた、馬鹿野郎、てめえらみてえな奴がいるから世の中がいづまでも明るくならねえんだ——というわけで、アメリカ製のつかい靴に向こう屋を蹴っくらされた。たとえ三十分だって明るくなる電球だ。それを売るから世の中が闇だとは、ずいぶん判らない話だが、警察なんて、どだい話の判らぬところだから、ぼくらは痛い涙をぼろぼろこぼし、バツタのようにあやまった。

かどの桶屋の息子のゲンちゃん、たんたんんとん、くるりくるりと桶を回わして働いているおとつあんの足にそっくりの足を持っていらしく、ぼくが落ちて消しゴムを先生にみつからないように、巧く拾ってくれたけど、ゲンちゃんには女の子をいじめる悪い癖があった。

ぼくの生まれた街には、たくさん

遊んでいたわけじゃない。みんな立派に稼いでいた。だがその稼ぎかたに問題があったのだ。ぼくらは、小屋の持ち主たという耳のつぶれたゴツイ男が持っている電球売りをさせられた。この電球はインキキなもので、一晩もば上等品、またたいては三十分でぶつんと切れ。切れないときは爆発した。そ

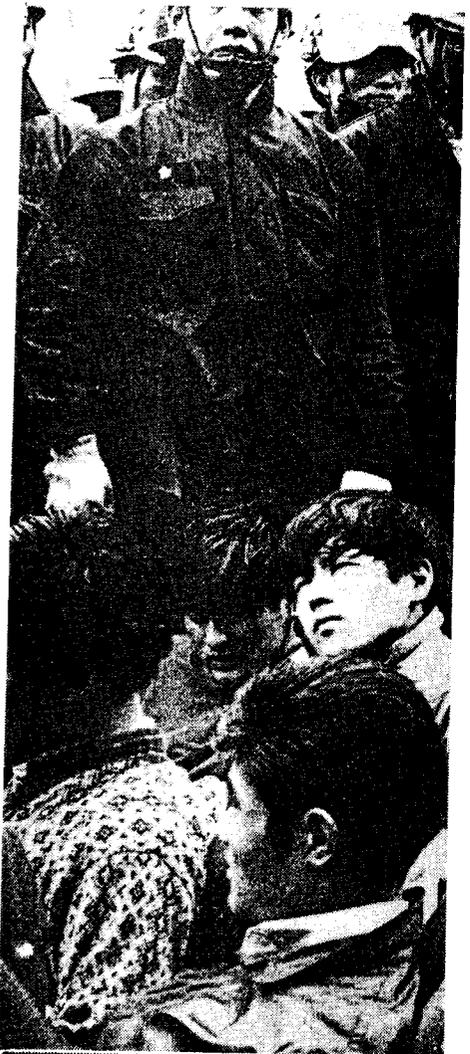
こんな苦みで稼いだカネは、ゴツイ男にご苦労だったと取りあげられ、代りにロッキンカンにちよつぷりの食い物を貰って生きていた。それはいまから二十年前、戦争が終ったころのことだ。

ゲンちゃんに一番よくいじめられたキミちゃんの家は印刷屋。活字の並んだ高い棚がいっぱいあってとても暗い家だった。もじゃもじゃもじゃ……念仏

電球売りをしたことがある。二十年前、戦争がようやく終わったころのことだ。東京はまだ一面の焼野原、それでも春から夏にかけては、その灰とガラクタの大地からヒモカシヨモギをはじめとする雑草が。緑あざや

オジさん、オバさん、電球買ってた。おれたち戦災孤児なんだ。だけど悪いことだけは

と小屋を出る。毎朝のことだ。



意志表示 2

統一戦線と選挙について

渡辺一衛

統一戦線というのは一般大衆にとっては実になんでもないことのように見えるが、指導者達にとってはとても大変なことであるらしい。だから歴史上、これこそすばらしい統一戦線であったというような実例が殆んどない。そして下部の一般大衆のイニシヤチブで

実質的な統一戦線が生まれ、リーダー達があとからそれを追認するという場合がしばしば起る。

統一戦線の事例として非常に印象深いのは、中日戦争の前夜に起った西安事件に際して中国共産党の態度である。これは張学良の共産軍討伐を奨励するために、西安にやってきた蔣介石が逆に張学良に幽閉された事件で、エドガー・スノー『中国の赤い星』に詳しい。このときの対策には延安から飛行機でやってきた周恩来が重要な役割を果たした。結果として、蔣は釈放されて無事に首都南京に帰り、張の方が逆に人質となつて南京におもむいた。この決定は全く驚くべきもので、当時中共一辺倒であったアグネス・スミスレーなど分らなくなつて頭をかかえたという。こうして中共と張学良とは蔣介石に抗日戦争の決意を固めさせ、そしてその中心となるべき蔣の名譽を傷けないように可能な限りの配慮をはかったのである。東北軍閥

の若い將軍張学良は、この解決に際して一身を犠牲にし、この時以後政治的世界から姿を消した。中共も抗日戦争中蔣介石に対して多くの譲歩をした。

こういうやり方は単にマルクスやレーニンをいくら勉強しても、それだけでは出てこないだろう。ここには非常に大きな自己の方針に対する自信と、自己の役割を客観化して見るのできる、モラリッシュ・エネルギーのようなものがある。これは中国共産党がそれまでの苦い経験の積み重ねの中から学んだ実践上の智慧だつたのだと思う。この智慧は論理化されることとなつた。中共自身が権力を握ると共にそれは徐々に失われてゆく。最近の中共の日本原水協に対する対策などはこの智慧が失われてしまったことをよく表している。

私たちは明治維新の前夜に薩長連合の統一戦線を実現した坂本龍馬という人物を持っている。彼が単なる

調停主義者ではなくて、生き残つた大久保・伊藤などよりはるかに民主的な維新の構想を持っていたことが今は知られてい彼の大きな。目標からすれば、薩摩・長州といった対立は全くとるに足りないことに思われたのである。

現在イギリスの核武装反対運動やアメリカの黒人解放運動における統一戦線の組み方は既して成功しているように思われる。私達はこれ等から大いに学ぶ必要がある。彼等は政治理論的には大して高いとは思われない。それがかえつて幸いしているともいえる。しかし理論が高いためにかえつて統一戦線が妨げられるというようなことであれば、そういう理論そのものに寧ろ問題があるというべきであらう。「政治的分派は無限に細分化する」という社会心理学上の「法則」がある。しかしこういう「法則」から脱却できない限り、日本の新左翼も、流行の思想に流される大衆社会的存在（サルトルのいう「情性的集合態」とみられても仕方ないだろう。共産党の悪口をいってればよいという段階はもう過ぎた。共産党の限界が誰の眼にも明らかになつた安保のときから五年たつたが、日本の非共産党層はその間に何ほどの政治勢力となることもできなかった。私達はこのことを恥しむなければならないと思う。

昨年八月二日の反戦集会、こんどの労働者戦線の結成などが、統一戦線の組み方にたいするよい経験となつてゆくことを望みたい。

選挙について

安保後の一時期、安保の挫折感からインテリ達の間には選挙ポイコットの風潮が高まつたことがある。私はこれには反対であった。きつすいのアナキストで今まで一貫して選挙をポイコットしてきた人はそれでいいと思う。マルクス主義者を以て自認し、且ては共産党

に投票したであらうような人達までそうなるのは軽薄な感じがした。それで三年前の黒田さんの立候補はよいことだと思つた。今もそういう気持には変わりはない。従つて「反議会主義」という表現には反対であつた。しかし一方で今度の労働者戦線の選挙をみてみると、逆に「議会主義」になりそうな心配がないでもない。組合の中などでやっているという気持になるものかもしれないが、「社会党・共産党に立ちおくれるな」といった感じがみられる。だが、グラウンドに平行に引かれた白線の上を社会党・共産党と肩を並べて走るといったのだったら、新しいのがもう一つふえたというだけでそれ以上の意味はないことになる。寧ろ共産党がそうなつてしまったことの中に批判されるべき理由があるのだと思う。トラックをなめにつつ切るような選挙のやり方をしてもいいものだと思う。

私はおとなしい人間なので、投票日に雨でも降らない限り、わりとまじめに投票してきた方だが、そのやり方は以下のとおりである。先づ革新政党的候補者の一人が当落ストレスのところにいるというときは、一人でも多く入つた方がいいからその一人に入れる。もう大勢はきまつていて、私の一票が全く影響ないと思われるときには、当選の見込みはなくとも、一番立場の近い人を入れる。このやり方は原則として今後も変えないつもりだ。だから私としては共産党が、当選の見込みの全くないでも票集めに熱心になるのは感心しない。選挙運動は宣伝センドウの機会としては十分に利用し、票は危い社会党の候補に入れるという風にした方が、かえつて民衆の信頼感を得られたのではないか。（その場合、社会党の批判は勿論つけ加えるべきである。だから私としては労働者戦線も票のことはあまり気にしない方がいいと思う。気にするとしたら、供託金を没収されないためにという実利的な目標をかかげるべきであらう。そうすれば投票は資金カンパと

いうリアリスティックな意味を持つ。具体的な効果とイデオロギーの持つ役割との、区別と関連をはきりさせて民衆の前に提示すべきだと私など思うのだがどうだろうか。

（選挙者）

反選挙は反議会から

秋山 清

議会というものが、国会から下つては町会村会のはしほしに至るまで、一向にわれわれの生活の向上、変革には役立たないものであることを、冷静にあたりを見まわしたら、誰にだつてわかる話だ。ただ、「議会」の他に何があるか、というのが、われわれの反議会の主張にたいする反論の根拠になつてゐる。まづこれは無責任なことである、自分にたいし、自分以外の者にたいして。

ベトナムの現在の問題を見て、ベトナム民衆のために協力援助を決定すること、一方の手で野坂参三の参議院議員当選のために働くことを、ベトナム問題における民衆の役目のようにいふらさずならぬ日共のいい分を見たと、これが議会主義のなれのたてだと思つた。いや、なれのたてどころではない。これが議会主義の実態なのだ。議会政策主義と直接行動（反議会主義）とは明治以来のわが社会運動に对立して今に至る二筋の流れの如くであるが、実さいはそうではなく、一方は革命的行動であり、一方は反革命的行動な

のである。非法時代の日共には、その中味、実体がどうであったにしろ、革命の党として存在したと民衆は信じてきた。信じられてそういう形に存在することができたのは、彼らが国家権力との妥協を排してきたからである。

地上に姿を現わした日共は、早速平和革命論者だった。平和革命論とは、議会の頭数の競争に終始すること以外に為すことがない。そこに敵の打倒はなく、オリビックのごとき競争がある。フェアプレイをよくそおった競技会のように、多いものが勝つただけなら、悪貨が良貨を駆逐することを建前としては認じている。これで政治的権力を掌握して財力を握るものに勝てようはずがない。

仮に選挙で左翼政党が勝利することがあり得ると考えて、さて、どんな形でそれが来るだろうか。しれたことである。日共が、あるいはそれよりも左翼の政党が、奇体に骨格となつて、民衆の現状維持の好みに合致した時でなければ「一票」はあつたらない。票をあつめ得るときがあつたとすれば墮落の果てに、それを望み得るかもしれない、というのが、極めて全く僅かなのぞみである。果たせることないそれは望みである。日共が愛される共産党などというダジャレをいくら飛ばしても票などついに集まらなかった。力のない政党に加担するバカはないからである。

議会の席を破るの河原みたいに数え殖やしていたら、いったい何時の日にも改革があり得るか。日共だとて、実さいは議会など民主的に運営して社会が明るく出来るなんて考えてはいないのだ。彼らの議会議主義は合法政党の看板維持のためにすぎないのだ。もし、日共などが議会で多数を得ることがあるとしたら、そこから独裁を組んだだけが議会の目的であろう。民主主義をよそおった独裁主義が、彼らの議会議主義を認める現

しんどくて判断を他人さまにあずけて行動する人間がそれによつてすっきりと晴れやかになり、身軽に行動できるようになつたなどと告白するのをきくと、情けなくります。そういう連中が、ほんとうは徹底的に軽蔑してやるべきなものでしょうが、そこがぼくのやや心情的なところで、そうも行きません。情けないなあとおもう気持ちを、批評に転化しようとしているだけです。

さて、批評には——もちろん、ここで批評というとき、現実を批評するというきわめて強烈な創造的行為のことをいっているので、片々たる文芸時評のたぐいのことでは全然ありません。それは現代の芸術の存在理由そのものだともいえるので、つまり、世界を解釈するのではなく変革するという、その「変革」とふかふかきなり合う内容の行為です。——もうおわかりでしょう、批評には、一つのフィクション（虚構）をうちたてることが必要です。もっとも巨大なフィクションをうちたてた一人が、マルクスだとぼくはかんがえています。

とんでもない、マルクスイズムは科学だ、などといったのかたは、まさかないないと思いますが、いうまでもなく、科学もまた、仮説をうちたてる能力です。

そこで、——といっても、どうせ選挙に関係のある話には、ぼくの文章はなりません。「前進」は読ませてもらっていますし、ときどきおもしろく読みます。選挙による選挙の（つまり議会議主義の）批評が、どう貫徹するのか、関心念の集まっています。

追記——六・一五記念の集まりを、ぜひおやりください。やることによって大きくなるようなやりかよ

（劇作家）

実の理由に他ならない。これは正確な意味での議会議主義などではない。その彼らさえ議会議として選挙をやる。自民党などに至つては、議会議と民主主義をかくれみのとする政治権力発達の合法的場所だとしか心得ていない。こういう成行は、自民や日共がわるいのか、という質問は無駄なことだ。現在の政党は勿論歪んでいる。しかし、歪んでしか存在しない政党が政党として存在するのは、議会というものが、本来、形を民主主義に借りた支配の場だからである。

われわれの反議会議主義は、このような考察の歴史と体験がある。議会は国民の利益な生活のために、代表が羅蓄を傾けて討論し新しい政策を考える場などでははじめからないのだ。ただ独裁と支配にペールをかぶせて、あたかもそれが、民衆の希望によつて民衆の代表が民衆のために、一切の政策を打出して平和な社会生活を守ろうとする所であるかのように、体験をつくるための、議政壇上であるだけだ。

一体日本の議会で、一般民衆の生活のために何か新しくきめられているか。それは革命的な変革を避けて変革をさけるための取引が行われるだけの設置にすぎないことを、歴史は証明している。私の危険すぎの内心はひそかに私自身をそそのかしている「議政政治よりもよほど独裁の方がいいんじゃないか。議会は衆愚の最低のところに下りてする多頭政治にすぎないんじゃないか。」私の議会議がいも、もうこのべんがざりざりかもしれない。

反スターリン主義者の選挙運動に私は勿論価値をみとめない。しゃべったり、わめいたりすることを、公衆の前で、公然とやるというだけのことにしては、一時的でも選挙運動の中に埋没してみたと何の意味もあるまいじゃないか。権威反逆者として私は諸君を認めるが、諸君にはいつかの日に権威者の座へよじのぼりたい夢をかくしているのではないか。

参院選をめぐる対話

大沢正道

A II アナキスト

C II コミュニスト

A やあ、選挙戦でいそがしいようだね。社会主義労働者戦線参院選挙アピールを読んだよ。

C ひとつ、君の感想を聞かせてもらいたいね。

A そうだね、まず状況分析が鋭切型じゃないかな。主観的な危機意識に支えられているけれど、実証的な分析が不足しているようにおもう。たとえば冒頭の、「歴史は、いま全世界を戦後最大の激動のなかへ放りこもうとしている」という見解、ぼくだって十分な情報をもっているわけではないが、最大はどうみてもオーパーだ。最近で最大の激動といえは、やはりキューバ革命とそのあとの一九六三年十一月のキューバをめぐる米ソの対立だろう。これとベルリン危機、これが最大の名に値するだろう。

C しかし現在のベトナム戦争が發展していったらどういふことになるか、君の観測は樂觀にすぎはしないか。

A ベトナム戦争が第二の朝鮮戦争になる可能性は十分かんがえられる。しかし、現在でも東アジアは世界の主戦場ではない。東西対立の時代から南北対立の

反選挙運動のない反議会議主義は運動として成立しない。選挙のたびに、反選挙を呼び、その根本が反議会議だことをいうのは、まだ先ながくわれわれの仕事となるだろう。

（六五・五・一〇）

（詩人）

また棄権するつもりですが

福田善之

もう何度か、選挙のたびに棄権をつづけています。理由は、とくに言いたるほどのことではありません。まず、それはぼく個人の問題であり、最後まで、ぼく個人の問題であると、頑としておもっています。

ぼくの作品の性質上、しばしば反対に誤解されるのですけれど、ぼくはほんらい極めて古典的な傾向のつよい人間です。したがって、ベトナム問題の解決に社会主義国家の義勇軍がキメ手になるなど、想像もつかない。自分の国の革命は自分でする以外にはないものであり、その自分というとき、日本人であると同時に世界人民の一人である、そういう自分だ、と心得ています。

義勇軍の派遣が、人民の連帯の証（あか）しだ、というような軽々しい断定を、ぼくは好みません。身軽な行動をぼくは一貫して支持していませんが、頭の悪さにささえられた身軽さなど、一度だつてみとめたことはない。複雑な事態を、自分のアタマで判断することが

時代に移る過渡期に世界はおかれています、とぼくはおもうのだが、たとえぼ中国、インドネシアなどによる第二回連の動きは一つの兆候だが、まだ決定的な対立の段階には入っていない。巨視的にいえばアメリカはベトナムから追い出されるだろうし、むしろ決定的な、最大の激動はそのあとの時期になるんじゃないだろうか。

C ひどく傍観者のだな。最大であろうとなかろうと、そういうことば尻をとらえて、屁理窟をこねているだけじゃダメだよ。アナキストは最も行動的なはずだが、君はどうも非行動的だ。

A 一口にアナキストといつたつて、いろいろあるさ。きわめて行動的なアナキストがいることは君も知っているだろう。ぼくは心情よりも理性に従う類のアナキストさ。理性はエネルギー経済の法則に立脚したものだから、現実的には行動のはなばなしさを欠くかもしれない。ヘーゲルは世界の哲学史を評して「人類の愚行の陳列場」と放言したそうだが、人間に愚行はつきものさ。だからせめて、理性のはかりで愚行の大海のなかをまとも航法していきたい、とおもうわけだ。君にはぼくの言うことが人間の屁理窟とみえるかもしれないが、適確な状況の把握はいつでも作戦計画の前提なんだ。それがあいまいであつたり、現実とかけはなれた主観的な願望の反映にすぎなかつたりしたら、作戦行動は九分九厘敗北に終る。三矢作戦をみたつて計算すると、敵はあらゆる場合を想定して綿密な作戦計画を立案した。ぼくらももっとも実証的な状況の把握につとめるべきじゃないか。

C それはそうと、われわれの革命的議会議主義の主張についてどうかんがえるかい。

A 革命的議会議主義というのは一種の折衷主義、苦肉の策だとぼくはおもう。ぼくは折衷主義者でもあるから、その主張には興味をもつ。折衷主義というのは

も敗北的な・消極的なやり方である。

社会主義労働者戦線は、反議会主義からの立候補、という誰の目にも矛盾にみえるその論理がよつてくる現実を、政治的に徹底的にあきらかにして、そこに共産党や社会党を突きつけた労働者運動(組織)の組織化を展開する、日本の労働者革命派としてたたかおう。

社会主義労働者戦線——浜野哲夫の名前を、クッキリと労働者・民衆のまえにうきたせよう。

駅前広場から工場、営業所から工場へと、わたしたちは、演説で、身振り、スローガンで、労働者の血と魂の声を、ハッキリと労働者兄弟の胸の中に伝えていこうではありませんか。(記者談話作)

参院選挙についての意見

マルクス主義公論政治部

一、反スターリン主義陣営の力を冷静に分析評価した場合、残念ながら選挙にさいして、独自候補をたてる条件が欠けていると思います。したがって選挙闘争よりも、当分の間は、思想、組織、政策の建設に専念

賃金を倍増するのように見せかけた、所得倍増計画は、実のところ労働者や勤労人民に対する搾取の倍増によってふくれあがった資本が、みづからそのハケ口を見出すのに苦悶するというぶざまな状態を国民のまえにあきらかにしたのです。

所得倍増政策の結果、日本の独占資本はずさまい勢いで発展した反面、労働者や勤労人民の生活には重苦しい消費者物価の値上げがおしかぶさってきまし。春闘という毎年の賃金闘争で、わずかな賃金の引上げ行われたとしても、消費者物価の上昇は、買上げ分を帳消しにするような勢いで進んでおります。もと下げられるべき卸売物価は独占の利潤確保のための管理価格のテコによって低下せず、中小企業や流通、サービス部門の近代化や改善は独占の搾取系列強化の犠牲にさらされているという今日の事態こそ、独占資本主義が社会的発展に全くふさわしくないことを証明しているに過ぎません。

一方における過剰生産、過剰設備の増大、他方における国民の生活必需物資の大巾な値上り、これこそ今日の社会的矛盾そのものの表現であり、単にいわゆる「ヒズミの是正」などによって解決し得るような生易しい問題ではありません。

佐藤内閣は発定以来くづれかけてきたこの資本主義的發展と経済政策を独占資本の利潤と資本蓄積の強化に向つてたてな勢い、このため労働者と人民に過大な犠牲を強制する宿命を負わされております。

今回の参院選前後にもし佐藤改造内閣の成立が許されることすれば、独占資本の要求や期待は今日より一層あからさまに佐藤内閣を通じて国民のうえに重くのしかか、ハイホーストーム。

今日程、国の政治と経済の根本的転換を要求される時機はありません。いまこそすべての社会主義勢力が、日本の社会主義

した方がよいと思います。

二、「アッピール」も、もつと政治的訴えとして現代的条件に即してこなれた内容のものであつてほしい。議会は資本家階級の支配の道具だから、労働者階級の大衆闘争に真の利益を守る力を認め、議会主義に反対し、大衆闘争の前進のためにのみ、選挙闘争と議会を利用するということは、旧来の左翼的公式としてはわかつて、これでは社会主義へ人民を組織する力にはならないと思います。既成政党のフハイと裏切りは体制的なもので、議会主義はその一表現なのだから議会主義に革命的議会主義を言葉として対置させるのではなく、主権在民の力を実際に実現する方法、有効な組織のつくり方を示す方が大切だと思います。現状では国会は自ら密権を放棄しております。また行政権力によって、完全に操縦されるをえないように出来ております。「革命的議会主義」でもって、大衆闘争のテコになるほど、簡単なものではありません。革命的左翼が道化師的役割を演じる結果にならないように、ブルジョア国家機構における議会制度の実際を、具体的に科学的に研究されることをのぞみます。

三、われわれはブルジョア国家においてはもちろんいかなる意味でも、官僚支配と翼賛的議員制を制度的に許されない体制を考案しなければなりません。現代は議会主義の表面的現象に反対するだけでなく、既成議会制度そのものにわかるものを創りだす時期だと思つております。これが反スターリン主義陣営の仕事でなければならぬと思つて、そしてこれは理論的にも實際的にも科学的態度と日常の地みない闘争の上での緊密な提携協力こそが当面必要かと思つております。参議院選をカンパニアや単なる啓蒙宣伝におわらせないことをのぞみます。

への転換を国民に訴えなければならない時機だといえます。とくに革新的社会主義運動の諸潮流は、社共両党が、労働者階級の運動のなかでその準備をなし得ていない現状では、一段と闘いを強化する必要があると思つております。

私たちがそのために、必要な政策と行動、投票態度について可能なかぎり一致点を求めるべきだと考えます。

投票態度の決定について

一、私たちは新しい日本の社会主義を過去のスターリン主義的運動と制度に対する根本的批判から追究し、またその為の運動を展開している以上、今回の選挙闘争においては、スターリン主義に對し批判的立場を明らかにし、革新的社会主義運動の諸潮流のあいだにおける共同行動や投票態度について可能なかぎりの一致点を見出すべきであると思つております。

一、私たちは社会主義のための闘争を労働者や勤労人民自身の闘いのなかに、組織的に着実に築きあげる必要を考え、とりわけ現在の労働運動の階級的転換を急務と判断しております。今回の選挙闘争のなかでも、革新的社会主義勢力は、げんざいの既成革新政党の労働運動の指導が、社会主義的転換にとつてふさわしくないものとして明確に批判的立場に立つべきであると思つております。

一、私たちは、革新的社会主義勢力は、日本の社会主義的転換に必要な過渡的政策において一致点を見出し、自民党と対決し、既成の革新政党に対する批判的要点を全国民のまえにあきらかにする必要があると思つております。

参議院議員選挙と投票態度について

社会主義労働者会議

開近く迫ってきた参議院選挙は、かつてない重要な情勢のもとで開われようとしております。

アメリカ帝国主義は世界戦争の危険をおかしつつペトナム侵略戦争を拡大し、アジア人民の平和を決定的におよびやし、彼らの軍事的植民地的利益の確保のために益々手段をえらばない暴虐行為をくりかえしております。

日本の独占資本と自民党は、陰に陽にこのアメリカの戦争行動と協力し、しかもアメリカのアジア政策の失敗や挫折を見越して、あわよくばみづからのアジアにおける指導権の再確立を夢みているといえましよう。

佐藤内閣が、何よりも手っ取り早く日本独占資本の植民地的利益を韓国に確立しようと強引に日韓会談を要結させ、あいついでアジア全域にまづ「経済援助」を前面に押し出し、やがて政治的軍事的進出を図ろうと準備を整えつつあることは自明の事実であります。アジアを中心とした日本の帝国主義的進出は今やあわただしく實際行動に移されております。

一方国内情勢は、池田内閣の時代を通じて展開された日本資本主義の高度成長は完全にゆきつまり、独占資本は資本主義的生長の破綻から一転して「不況」対策にうき身をやつす結果となつております。

とくに参院選全国区において、保守党から革新政党に至るまで、あたかも現在の参議院が職能利益を代表し得るかのような言動で立候補しようとしてい対し、批判的態度と政策的対決をもつて臨むべきだと考えます。

一、以上のような立場から、私たちは今回の参院選の全国区の場合

社会主義労働者戦線の予定候補者浜野哲夫氏に投票態度を決定いたします。

一、私たちは、労働運動活動者会議やその他の機会を通じて、社会主義労働者戦線を含めた諸潮流の交流に参加しておりますが、充分選挙闘争についての意見交換の機会を持っておりません。また社会主義労働者戦線の発表されたスローガンに全面的な賛意を表しておりません。しかし、今後さまざまな機会を通じて、お互いの努力によってこれらの問題の解決に当たりたいと思つております。

一、私たちは既成左翼、とくに日本共産党が長い間社会主義運動のなかに植えつけてきた官僚主義、思想的偏執による他党派に対する中傷、トロツキスト、修正主義者などというレッテル貼り、を革新的社会主義運動のなかに持ち込むことなく、とくにこの選挙闘争のなかにあつては、共同行動や投票態度の決定について必要な協定を可能なかぎり追究することを訴え、そのための努力をしたいと思つております。

一九六五年五月十五日



革命路線の論争と 政治行動の統一

小山弘健

全院選・掃蕩選の接近と他方でベトナム戦争・日韓問題の緊迫化は、あらためてわれわれに、革命路線をめぐる理論論争と政治行動の一致ないし組織の統一化との関係について検討することを要請している。

社会党や共産党以外の諸組織における新しい動き、たとえば「新左翼」の方面における選挙共闘委員会の

成立、「戦闘的左翼」の領域における社会主義労働者戦線の結成、そして三月以降ベトナム戦争阻止のためのさまざまな統一行動や共闘形態の出現——これらの事實は、すでに右の問題を根本的に追求するための現実の基盤を提供しているように思ふ。

戦前の反体制運動においては、全体として非常にせまい運動分野のワケ内で、綱領や基本コースについての意見の対立が政治的組織的な対立と直結してしまいい、それがさらにあらゆる個々の政治行動の統一をもさまたげた。それは、当時の各組織が思想のうえでも組織体としてもまだ十分主体性を確立していなかったために、原則問題や基本コースについての論争を直接の政治行動の次元からきりばなして処理するだけの余裕をもたなかったからである。

その意味で一定の必然性があったといえるが、しかしそのことは、戦前の反体制運動が天皇制軍国主義に

な党利己主義と党利用主義が一貫してつらぬいていただけだ。

然共産党とくらべると、社会党には派閥や分派の活動間にかとみとみられ、基本コースの問題や綱領の問題公について党内で論争する自由もあまりない。これは、その党内論争のあり方が正しいかどうかという点だ。最近、同党の佐々木・江田会談において、「参院選挙とベトナム戦争阻止のために、原理・原則上の論争を一時中止すること」に一致をみたといわれる。ここでは、「原則上の論争」と当時の政治行動の實踐とが、本質的に矛盾し排除しあうものであるかのように考えられている。ウラからいえば、社会党にはこれまで、そのようなかたちでの「理論論争」しか存在しなかったということだ。以前の綱領論争にせよ最近の権威論争にせよ、党内の論争はつねに派閥論争に利用されるか、逆に派閥論争が理論論争のころもをかぶってあらわれるかであった。これでは、派閥論争の休戦が政治行動への集中の必須条件となると同じように、理論論争の休戦が政治行動の統一の前提条件とされるのは当然なのである。

もしも基本コースや革命路線について論争することが政治行動の統一や集中にとって本質的に矛盾するものであるならば、政党や政治団体は永久に原則上の論争をおこなえないことになるだろう。社会党にしてもおそらく参院選やベトナム戦争の問題にすぐつづいて重要な政治行動の課題が提起されてくるだろうから、論争の休戦の方もいつまでも必要だとする理屈にならざるをえないのだ。こうしたまがった考えが、党外での政治行動の一致のために適用されるとしたら、結果として共産党と社会党の党利己主義による御都合主義的な共闘方針におちつくほかはないだろう。

既成革新組織がこのような状態にあるとすれば、綱領や革命路線についての対立と政治行動や組織の統一

との関係の問題について、戦前の教訓を今日に生かすしことは、どうしてもこれら既成組織のワケにとらわれない革新政治勢力に課せられていくことになる。かくに現在さまざまな分化分立して「新左翼」や「戦闘的左翼」をふくむ広範な非党左翼の政治勢力は、この問題を発展的に解決していくことなしに、今後独立の政治勢力として自己を強化し定着させていくことは不可能であろう。

現在では、原則上での理論論争やイデオロギー的対立を政治行動の分裂や組織上の対立と直結させてはならないこと、原則的論争を政治行動とはべつ次元であつかうということ、一方で両者を絶対的にきりばなすことであってはならないこと、原則上の、あるいは革命路線についての公明な論争とその深化こそが無原則的な組織統一への歯どめとなると同時に、個々の具体的な政治行動の一致からより高次の組織の統一にまでいたる過程の確固とした基礎と展望をあたえるものであること、したがって、各組織の内部でも組織間においても、原則的論争の最大限の自由が保証されると同時に、一方で共通の目標のための具体的な政治行動の一致と共闘組織のくみあげのための不断的探求がなされる必要があること——こうしたことはすでに十分みとめられているのである。問題は、実にこれにそれがどのように実践されているかである。

この観点から、たとえば選挙のための共産主義者共闘委員会のありかたを、みてみよう。これは、日本のこえと社会主義革新運動を主な構成要素として、これに統社、その他からの有志や個人が参加してなりたつていて、中心の一つである日本のこえは、周知のように共産党(代々木派)から最も新しく分離した勢力であるが、現在まで明確な革命路線についての意見を発表していない。同派はこれまで、第八回大会で採択した綱領にたいして、代々木派がこれをねじまげて一面的

よって敗北させられた最大の内部原因がそのイデオロギー的対立にもとづく政治的組織的分裂の固定化にあったという事実をすこしでも正当化する理由とはならないのである。

重要なことは、この戦前の敗北の教訓が戦後の運動にかならずしも発展的にくみとられていないという事実である。周知のように、一枚岩をたてまえる共産党には、党内そのものの中論争などの原則問題や「二つの派」などの革命路線の論議をおこなう自由がまったく存しない。あるのは、一部の上級幹部の官僚的決定にたいする無条件の服従と盲目的な行動の「自由」だけである。党外にたいしても自党が支配権をもつ共闘組織への加入という形態での「政治行動の統一」への要求があるだけで、これと併行しうる原則問題や基本コースについての公明な論争とコミュニケーションの余地はまったく存在しない。ここには、セクト的

に解釈し実践しているということ、この綱領そのものが現在の時点において再検討する必要があるということ、この二点をあきらかにしているにすぎない。要するにチガナ主張だけで、積極的な綱領的意見はなにもだしてないのだから、これにくらべて、社革の方は、すでに代々木派綱領に対抗する別個の革命路線を発表しており、さらに今後の組織的結果のためには当分行動綱領的なものでやっていってもよいという意見までも公表している。

この場合基本コースについての共同の討議や原則上の意見の一致なしに共闘組織をつくることを非難するのは、明白なやまらみである。問題はそこにはなくしてむしろ当面の政治行動の統一や共闘形態の維持のために、当然なされるべき日共綱領や社革の路線や日本のこえの意見についてのほりさげた論争や批判が、回避ないし阻止される兆候がすでにあらわれていることであらう。組織の統一化のために当面は原則綱領を必要としないということは、それについての相互の徹底的な追求と論争をタナあげするということであってはならないし、政治行動の一致を拡大させていくために多様な組織方式を探索するということは、そのために日本の革命路線や中論争などの原則上の問題にたいする論争や批判を中止せよということであってはならない。この点すでに表面にあらわれつつあるかなり安易な共闘委の傾向が、主要構成要素の体質的なものからなっているのだとすれば、今後の可能性はきわめて限定されており、それは決して独自の革新政治勢力として定着できないであろう。この点、内在的に死活の問題がそこにくまれているのである。

これとおなじような課題と試練とが、やちがった意味ではあるが、「戦闘的左翼」の諸組織の肩にもかけてられていると思う。われわれは、革命的共産主義者同盟の「反帝国主義・反スターリン主義」のスローガ

ンを大きくことずでに久しいが、率直にいうと、この戦略論的な解明やウラづけについて、まだ十分説得的なものに接していない（私個人としては、この問題について、対馬忠行氏と手紙で大分論争した記憶があるが――）。最近この「一般的」な主張について、共産主義者同盟が一定の疑義と批判をだしてきているのもそのためではないかと思う。だがいずれにせよ、こうした原則上での問題点をたがいにみとめたいので、今次の社会主義労働者戦線を結成したことは、「戦闘的左翼」としての画期的な進歩であろう。われわれとしては、これが政治行動の一致と共闘形態の一その発展をはかりつつ、「反帝・反スターリン主義」の原則的論争をも併行的に深化させていくことを、つよく期待するのである。この問題の真に創意的な展開という点で、最も大きな可能性を「戦闘的左翼」の諸組織は持っていると思う。

内外の事態がますます緊迫化することが予想される現在、既成革新組織が当面の政治闘争の必要から根本的な革命方針の追求をタナあげまたは封殺していることとするのたいして、われわれは逆に、原則的論争や批判の徹底化によって、政治闘争の統一の前進により大きな照明をなげかけるのでなければならぬ。

（評論家）

戦争と革命の中の青春

斎藤竜鳳

私は一九四三年から四五年まで、日本帝国海軍に

はいやというほど、この目で見て来たので心情的にはものすごくわかるが、だからといって反スタの理論が私の内心に定着しているわけではない。

スペインの内乱は小学校四年、五年、六年の時であった。私はニュース・フィルムでスペインを知った。かなりの量を見た。どちらがいいのか、さっぱり理解出来なかったが婦人まで銃を持つショットの数々に、いい知れぬ感動を覚えた。

今、私はそのどちらにすべきかに迷うようなことはない。フランコに銃口をむける。

だが、P.O.Mに入るか、イベリア・アナキスト連合について従軍するか、第五大隊に入るか、厳密な選択を迫られた時、私は困惑するにちがいない。

しかし、長時間の個人的ためらいが敵にとって利になるなら、私はどこでもいい、手近かな塹壕に入り、一発でも余計にファシストにむけて引き金を引くだろう。

無原則だろうか？ そうは考えない。

内部の敵を誤って告発するくらい、悲惨な話はない。分派符り、スパイ摘発、トロッキスト符り、疑わしきは罰す式な「総検運動」に私はウンザリとした。

ミンもクソも一緒に清算する思考の根源には、ほぼ官僚主義があぐらをかかっている。私はこれが大きい。マル共を離れた最大の原因はこいつである。やがて、あなた方の政治組織は大きくなるだろう。大きくしなくてはいけない。組織と名づけられるものの意味の大半は頭数の大小である。大きくすると小馬鹿にした組織は、サークルに落ち、クラブに墮しやがて消える。

だが同時に、大きくなりつつある時、官僚主義や清算主義もまた芽を吹く、これは組織と、そこに集結した善意の人々をダメにする病源菌だ。革命的左翼は、互いにかみ合うことをやめよう。フ

た。終戦は鈴鹿海軍航空隊でむかえた。一九四六年から六全協の青年まで、私は日本共産党員であった。青春と呼べる年月は、戦争と革命の中で無為に磨滅した。

△戦争の部▽ これは帝国主義戦争の末端拙い手としてすすんで参加した。十六才から十八才までである。私は自分の体験から推し量ると十五才以上戦犯説である。

△革命の部▽ 革共同の人々にいわせたらスターリニスト、としていくらか怠だではあるが、マジメに革命をやろうと演じた。ちよつとしたポイントにはいたが、兵隊の位でいったら上等兵、いっこうにエラクはなれなかった。しかし、その後の私にとって、海軍と日共はやり大きな意味を持った。

この二つの士官学校の存在を経なかった場合、今日における私の個性は、かなり異ったものだろうと思う。良きにつけ、悪しきにつけ二つの組織は私に生きる上での凶々しさを与えてくれた。

未練がましく傷あ、という人もいるが、私はそうは被害的に考えていない。二つとも自ら好んで飛びこんだ所だ。

私個人の期待が口共に裏切られたといつて、そのことが即 日本革命を私が裏切つてはいない口実とはならない。

私は相変わらず革命的左翼を自称している。敗けても敗けても、最後に一度、でかく勝てばいいのだといひ聞かせている。

△ 私は間違いなく反帝主義者である。そしてプロレタリア国際主義を金科玉条にしている。だが、あなたたちのいう「反スタ」こいつは論理的に何もわからないイタメにイタメつけられたし、大衆組織のひき回し

△ フシスト、こいつらを絶滅しよう。

△ 私の職業は映画批評？ である。活動写真から約十年ぐらいいか経ていない不完全きわまるジャンルなので批評といつても、さして権威あるものではない。敵か味方かを見わけ、敵なら叩き、味方なら持ち上げればまず「ナリワイ」として成立する。その点私は旗印を鮮明にし、エゴヒキすることが批評だと、きめている。

△ 日教組も悪いけど、文部省も悪い！—そういう評価は、口がさけてもしないつもりだ。

（映画批評家）

運動の中の運動無関心

——自戒的な独言

野田真吉

△ 安保闘争のあと、わが国の革命運動は一気の速くなる。ようなながい道をふみつつけて達成するだろうといわれた。改めていうほどでなく、運動はいまでも

△ そうでもあったように、これからもそうであろう。口先や小手先細工のハツタリ戦術で、数千年も、あるいは数万年もかかっていた社会体制と意識を掌をかえずように変革することはできようはずがない。自分の意識のなかをのぞきこんでも、それはわかんなくしたり、くずされたり、さらにくずしてゆく積みかさねの上に、真の変革がおこなわれるだろう。要するに、手をゆるめず、くずしつづけなければならない

浜野哲夫

社会労働者職線付表

労働者文庫を讀もう

- No. 4 / 四一七ストと日本共産党 ¥ 50
- No. 5 / これからの労働運動 ¥ 50
- No. 6 / 生活はなぜ苦しいか ¥ 50
- No. 7 / 革命的共産主義—その理論と歴史 近刊

申込みは前進社

△ と思う。ながい道程を短かくし、飛躍するにはその軌跡以外にないと思う。

△ 気の速くなる話とわかつて、気の速くなった者が、安保闘争以後、続出した。彼等は政治ざらになり、政治無関心主義にはしり、気の速くならない手近な安定ムードのなかに、後生安楽をきめこんだのである。

△ 彼等の言いは政治のうすぎたなきに對する純潔の保持であり、政治からの自立確保のためであるといっている。政治がうすぎたいのは当然である。うすぎたない政治の息の根をとめることが、革命へのたたいであると思う。だいたい、彼等のような言いは運動のなかで敵対物をくずしたことも、敵対物にくずされたこともなかった者のカッコのよい自己弁護である。運動に彼等がかかわった時でも実は無関心であったのである。つまり、彼等は運動を形どる経験したにはしたが、身をもってそのうすぎたなきを自分のものとしてうけとめていないのである。うすぎたなきとそれとのたたいの必要を痛感すれば気の速くなる変革の道が発見されると思うのである。だが、彼等は實際のところ、ながい道程を発見して速くなったのではない。眼前の、あるいは周辺の安定ムードのさらびやかさに気が遠くなったのである。

△ もともと変革の道程を歩ゆんでなんかないなかったのである。……

△ 彼等をあげつらったけれど、僕なんか、しばしば運動のなかの運動無関心におちり易いのである。気の速くなる道程を忘れくずしつづけなければならないと思う。そして、僕のなかにうまれる運動のなかの運動アバシイをくずしつづけなければならないと思うのである。

（記録映画作家）

共同の闘いを 荒川 澄

(三葉集時評) (労働者記者)

浜野哲夫君の立候補は、日本に於ける労働者階級解放のためのたまたかに一時期を画するべき事であると言つて過言ではないでしよう。国会議員と云えば、パッチを光らせて、赤いジャータンの世界に住む人々であり、私たちの現実の闘いとは別世界の存在であると思われてきました。しかし、労働者階級を真に代表する議員は、常に大衆闘争の先頭に立ち、院内に於いては、議会が労働者を抑圧するものでしかないことをバクローすることが任務でないばかりではありません。浜野君は、この任務を責任をもって果しぬくことと確信します。

幾つかの点に於いて意見の相違を持ちつつも、無名の新人、浜野哲夫君を推薦する理由はこの点にあります。

また、安俣、三池から四・一七、原潜を経て今日に至る巨大な階級闘争の鼓動は、自称「革新」政党的救い難い欺瞞を白日の下につき出しました。そうした現実から育ち、鍛えられてきた革命的左翼の潮流は、いまやわが国労働

運動に於いて無視することができない位置に立っています。点的自己満足屋に終りたくないならば、こうした新しい左翼にとって、来たるべき六月は沈黙と逃避が許されない政治闘争の場といわねばなりません。日常の諸闘争でいくどなく杜共への不信を強めた仲間たちが、選挙の中に於いて、一転して杜、共への投票に収れんしていく現実には、私たちは目を閉じることができません。

職場で苦闘する無数の兄弟たちに、さっぱりとその政治的行動の行く手をさし示すことなしに、この六月を過ぎすことは許されぬことだと信じます。

むろん、いま、党も未確立だし、綱領も未確定の段階に私たちの歩みはあります。併し、であればこそ、この特殊に過渡的時代に於いて、私たちは革命的左翼をめざす全ての諸君と共に、共同の闘いを訴えたいと思ひます。長船社研はこのために、最善をつくして奮闘することを誓います。

がんばれ 全通A支部長

の労働者の戦闘的デモを目の前に見、春闘のかけない戦闘的もり上りを無上の共感をもって見つめた。全産業をおおった怒濤の如き賞闘の波はいかなる公認指導部の思惑もはるかにのりこえて日本帝国主義の足下をゆるがした。

学生戦線はこの労働者諸君と連帯して進撃している。マルクス主義学生同盟はもって全力をつぎこんで、ベトナム、日韓闘争を闘い抜いて、参院選闘争の中では「闘う労働者の代表を国会へ」のスローガンを全学生のそれに高めるために奮闘するであろう。

火急の責務

浜下武志

(東大教養学部自治会委員長)

全国の闘う労働者・学生諸君、参院選を前にして、私は心から訴える。来たるべき社会主義日本革命のためにわれわれの闘う代表を支持しよう。

われわれは昨年、原潜艦の日本寄港に反対し、日本の核武装化とアジア軍事体制介入に反対してきた。そして現在事態はさらに進行して日本の支配階級は朝鮮再侵略に乗り出し、その第一歩として日韓会谈調印を五月にも強行し

こんにち労働者階級の利益を代表する政党として、共産党、社会党があるといわれているが、彼等は戦後二十年間、休何をしていたか？

労働者の力を結集できず、希望を与えることすらできず今や老化現象を呈している。労働組合の内部が、公明党、民社党に浸蝕されつつあるにもかかわらず、闘いの展望を示さず国会に代表させれば世の中がよくなると思ひ込んでいる彼等に期待することはもはやできない。

このときに、労働者の真の利益を代表する新しい政党をつくらうという集団より、その代表として浜野哲夫君が今日参院選に立候補することになったことはうれしいことです。労働者の期待に反せず立派に闘いを前進させて下さい。

(組合の事情により特に匿名にしました)

この旗の下に

北小路 敏

(元全学連委員長)

清水丈夫

(元全学連書記)

五年前の安保闘争では、起ち上った何十万という労働者・学生の力は、結局、階級的に結集されずに終った。当

ようとしている。今や日本帝国主義の経済破綻は明白であり、彼らのあがきはますます狂暴な海外侵略とわれわれに対する圧制へ突き進むだろう。そして、それはベトナムを中心とするアジアの危機の深化と共に激しくなるだろう。

この迫り来る激動を前に、今からこれと対決し帝国主義を打倒する闘いを準備することは、全ての闘う労働者・学生の火急の責務ではないだろうか。そしてこの闘いの勝利の展望は、社会主義日本革命を準備する社会主義労働者戦線の前途にかかっている。そのためにも反動の嵐に抗するわれわれの闘いを参院選に結実しよう。日韓、ベトナム闘争と固く結合しつ。

全力あげて

田川和夫

(元日本共産党東京地区責任委員)

日本鋼管にビラ入れにいったときのことである。日共黨員らしきものが大声で叫んだ。「トロがまたいるのか？」しかし、われわれは健在である。ただ彼が、アカハタしか読まず、日共系の集会にしか参加しないから、安俣以後の革命的共産主義運動の前進に接する

時の私たち自身、社会党、共産党の誤った思想と指導をほんとうに打ち破ることができなかった。

以来五年間の私たちの闘いは、そのときの問題を根底からえぐりつつ、私たち自身を日本における労働者階級解放闘争の責任ある担い手にきたえていくための歩みであったと思う。

社会主義労働者戦線を結成し浜野哲夫を押し立てて行われる今回の選挙闘争は、安俣後の闘いに飛躍的段階を画するものであり、「雌伏五年」の私たち革命的共産主義運動の成果を全国に問うものである。しかも、これが労働戦線における戦闘的左翼の昨年以来の統一行動を基礎にしてかちとられたことは、日本労働者階級の内部に杜共を乗り越えた不拔の勢力が胎頭しつつあることを、はっきりと示している。

全国の諸君、この社会主義労働者戦線の旗のもとに結集し、共同の事業に向ってさらに前進しよう！

奮闘する

青木五郎

(工学同窓会)

今日、全国の一切の学生の目はベトナムと日韓に集中している。先日のテ

ことができなかつただけだ。私の経験からいっても、それは彼にとって不幸である。だが、依然として「喰わず嫌い」が多いことも事実である。このような人たちが、われわれとともに、反帝・反スターリン主義の闘いに参加するよう私は全力をあげて闘う。浜野はそのためのわれわれの代表である。その鍵は、四月五月闘争の戦闘的展開をつくりだし、参院選闘争のなかにもちこむことである。

職場から

進藤成志

(三菱製鋼所)

自分は過去十五年間多くの仲間がそうであるように、汗とほりにまみれる中で社会変革を目ざす一踏物労働者として働いている。

あの安俣や三池での主客転倒したコックイ会議会民主主義ウゴウの叫び声はまさに救いがたき社会党、共産党の反労働者的行動をバクローし、われわれ現場労働者の新しい部隊への結集となつて表われた。

現在議会に対する労働者の持つ冷淡と無関心は、ブルジョア議会主義のわく内だけで行動する自称革新党への労

働者の持つ本質的な批判となつて表われている。

議場でのオシャベリだけが政治と心得、そう思い込ませたがっている彼等に、今次参議院選の中で大衆の宣伝として対置させるものは何か。革命的議会主義そのものである。

今次参議院選を闘う中で、新しい左の部隊の一員として現場労働者の自分が予定候補として討議されて行った。自分もコミニストのはしくれとして日本ニューレフト運動の一つの焦点に立つことを大いなる荣誉と考へ、自己考察し議論に参加していったが、家庭の事情、その他によって断念せざるをえなかった。幸いにして関西革共同の浜野哲夫氏が社会主義労働者戦線の統一候補として決定した。

全てを浜野氏にたくし、今次参議院選を職場で地域でがんばって行く覚悟である。現在「前進」やパンフを通じて職場の人々と話し合いを進めている。社会主義労働者戦線に結集し、日本独占資本をして戦りつせしめよう。

巨大な炎の闘い — 出版労働者 —

バトカーに追われながらステッカー貼りやったり、社共をめぐつての議論をしながら職場の仲間からカンパを集めたり、はじめての選挙闘争を闘いはじめて、一カ月あまりになる。

どが除名されながら、元兎の方はうやむやにして澄している。トラック部隊の収奪を車事資金の捻出だという説があるが、選挙の時々の無理算段と符合していた。

代々木が今度の選挙に東京から野坂をたてるのに対し、志賀のグループでは神山をたてる。この連中が離党も脱党もしてないのは、代々木の中国路線に対し、代々木のソ同盟道随派なのを問はず語りしている。(春日庄次郎らの離党までは時期的にも容認できると、区別していい。しかし志賀らのグループは信用しない。過渡期的な同じ穴の二系列で、中々如何で、早晩一本化し、支配的な力につながる方が主導権を握るだろう。従って神山の立候補は、野坂をおとす消極的意味あいと、ザツとこのくらい支持層をもっていきますと、ソ同盟に認めてもらう以外に何がある。神山は安保闘争で代々木側で全学連の矢表に立ったと自慢している。彼は全学連の二、三人の人が田中清玄に援助をうけ、就職したのを以て、数派ある全学連を否定しようとする。しかし代々木中ソ両派の諸君の立派さは二、三にとどまらず、枚挙にいとまがないから省略した。

例えば「群像」四月号で、平野謙が現在宮本らのやり口は五〇年当時の徳球らが、宮本、蔵原らを疎外したのとどのように違うかと痛いところにふれると、蔵原はトボけ、あの時は中央委

支部の討論で、社会主義労働者戦線からの立候補の意義について何回か確認してから来た。その後春闘を懸命に闘いさらに吹原事件、東京都議会の汚職問題などが暴動される中で、毎日職場でタタタになるまで働き、闘い、憤っているわれわれの本当の声を、全国的に巨大な炎としてもえ上らせるためにこの選挙は全くのがすことのできない機かたという気持ちになつて来ている。

先日、仕事の帰りにやきとりやで一汁一杯やっていたら、「春闘で三千万もとれないのに、片っ方は三十億円の預金のインキキだ何だ」といっている、全く頭に来ちゃうよ」というような話から、「今年は私鉄は強かったな。おれんとはもつとやれたのにな」と話題が飲んではる連中の中でひろがり職場は見ず知らずのところでも、案外同じことを考へ、感じているものだと今更ながら「発見」した。「前進」を読んでいればその読者の間では、このような共通の感覚や問題意識を交流し合っているわけだが、これをもっと公然たる——それこそ春闘の波状ストで爆発した全国の仲間の闘いの潮のように——闘う労働者の声として選挙でもぶち上げて行きたいと思う。

員多数による決議を、徳球系政治局でくつがえしたのだと逃げ、あたかも中央委は何時も正しかったといわんばかり。事實は中央委で徳球側が十四対七で優勢だった。党史などこういう手法で、ちあげられる。比較的穏健のように思われ、統制委員に選ばれるような人物がこれだ。代々木の連中がスケスケと嘘をつくのには、ザツとこんな具合だ。もつと「前進」の支持分子にダメされるような甘い人はたの一人もないだろう。

反議会主義の 立場で 高知 聡

(熊組の会々誌)

私がバリ・コミュニケーションについて知ったのはハンガリア革命の直後であつた。そのときから私はコミニズム主義、すなわち反議会主義の立場をとることになつたのであるから、私の反議会主義も間もなく十年になる。けれども、三年前、黒田寛一さんの立候補に幾分かの協力をしたときの経験によつて、反議会主義なんぞという訳の解らぬ思想も、あの種の候補者なしには容易に展開し得いことを知つたので、今回もここに名を連ねることになつた。ところ

三つの注文 増田格之助

(元日本共産党
東京都委員)

政治組織は、選挙に背を向けてはいけない。ポイコットの情勢でない以上選挙を議会内的なものに限るのでなく、力の限り立候補すべきだ。戦前の獄中立候補も、闘う姿勢を示すためだった。全国区を見送るべきではない。特に全国区では、参院全国区選挙そのものの現状をぶち破る闘いが必要だ。全国区は保守系が医師会や土建団体等職能代表を立て、労働者の側も組合の組織割当てで同じようせまめい集団の利益代表を立てるばかりだ。共産党も元日教組だ元元教組だ、と力もないのに同じものを求め、その奪い合いで「政支支持」争いを行っている。これではいけない。選挙は政治的主張に基いて大衆を結集して行くものであり、組合や職能のワラをこえて、労働者としての政治的自覚を示すべきものだ。党はそれを積極的に進めねばならない。浜野君の立候補は、そうした闘いとしてあるだろう。

これは今日の労働運動全体の問題でもある。参院全国区から地方区、衆院

で、三年前に私たちは、演壇の取りはずし、怒号スローガンの廃棄、そして闘いの中で討議、といった具合に、パツカスの祭宴ぶうのイメージをとり入れた選挙のための政治集会を催したが、このコミュニケーション方式の集会は、その政治組織において何ら習慣化されておらない。したがって、私がここに名を連ねるのは、それを批判するためといひきつておかねばならず、そのために私は独自の活動をするつもりなのである。

戦線結成に よせて 鶴見俊輔

(『選挙者』)

それぞれの敗北が、その敗北とまっすぐに向きあうだけの気力を持つ新しい戦士を育てる。一九六〇年の安保闘争が新しい戦力を持つ若い人たを育てるきっかけになつたと思う。この闘争に参加した若い人たちが、五年後の今日、「前進」という週刊紙を自分の力で出しつづけているという事実注目する。この人たちの中からこれから十年後、二十年後に日本が切りひらいてゆく未来のコースがあきらかになつてくることを私は期待する。

へ、さらに組合運動そのもので、系列化してしまうことに対する反撃である。今日の私達の運動は、こうした出来上つた「体制」を打破る闘いなのだ。さらに、選挙の場では、結果が票に表わされることを忘れないうでほしい。目標をはっきり立て、それに向つて進むことが大切。選挙は宣伝と同時に「組織」の場であつて、一般的宣伝ではむしろ入りにくい。日共のように、票とりのため自民党と変な入り込みスローガンを並べながら、票がらぬのを「人民がバカだから、弾圧されたから」とするのはいかたがたである。

第三に、鉄のごとき原則を貫くと同時に、それをいかに大衆の中に取込むかについての柔軟な戦術に十分な配慮を注ぎたい。これらの注文をつけて応援したい。

カラスの雌雄 大井広介

(『選挙者』)

下請けの中小メーカーに致命的被害をもたらし、社長や重役はノホンと恥はうとせぬ山陽特殊鋼事件の原型をトラック部隊事件にみる。とりこみ詐欺の被害倒産者をだし、大村英之助な

革命的展望を 岩田 弘

(『選挙者』)

ドルポンドを中心とする国際金融体制の動揺、その中で帝国主義諸國の市場争奪戦の激化、東南アジアにおける階級闘争の尖鋭化とそこに帝国主義諸國および中ソ両國が深くまきこまれていること、これら一切の事情はあらたな世界危機——革命的危機の時代が切迫していることを示している。他方こうした中で、最近の山陽特殊鋼の破綻は日本資本主義の運命を予示している。日本資本主義とは、世界資本主義の中で山陽特殊鋼であり、その最も弱い環である。日本における階級決戦は不可避であり、そこでの社会主義プロレタリアートの勝利は東南アジアにおける階級闘争に革命的決着をつけ中ソプロレタリアートに革命の決着をつける。それが日本労働者階級の世界的任務であり、そしてその任務を労働者階級の前に真正面から提示し、当面の階級闘争に巨大な革命的展望をあたえることが社会主義労働者戦線の第一義的義務である。

「日ごろなまけ者で不誠実な分子が、こんどにかぎってストライキを主張した」(四・一二声明)と日本共産党が昨年四・一七ストに反対してかいたときのことを思いだす。

今年の四・二六ベトナム戦争反対の闘いと春闘の高まりは、反動的政界の官僚の目からみれば「なまけ者で不誠実な分子」とよばれる労働者をも含めた、大衆のヘゲモニーによってからとられたものである。日本の階級闘争の前進を意味するこのような事件は、安保、三池の後に谷川雁が「組織のあるところにエネルギーはなく、エネルギーのあるところに組織がない」といったふうに見みえた状態が、いまふみこえられつつあることを示しているのではないか。

四・一七のために闘い、一一・七の原潜阻止の闘いをつらぬき今春闘と四・二六を担った戦闘的労働者が四・一七の教訓をしっかりとふまえてこの闘いを推進したことはいうまでもない。

総評、中央労連、社会党に社青同、都学連を加えた「四・二六、戦争反対／アメリカのベトナム侵略に抗議する国民総決起集会」は首都圏と地方代表あわせて昼夜五万の労働者学生共闘として闘われた。

当日は安保四・二六闘争(国会前で全学連をはじめ装甲車のバリケードを乗り越えた闘い)の五周年にあたり、十一都道府県二十五カ所で反戦の集会、デモ



広田 広

がおこなわれた。

昼一時半の中央集會は日比谷野外音楽堂の地方代表団公務労働者およびいりきれない周辺で集會をもった都労連、あわせて二万、それに都学連の学生三千を結集した。会場入口には「闘いの日は来た、警官隊の妨害をはねのけ、米大使館前すわり込みを断固として闘え」とうのピラが社会主義労働者戦線の名でまかれ、同名の大タテ看板の前で革共同、マル青労同のハンドマイク隊が演説した。

集會は総評社会党、地方代表などのベトナム戦争反対の決意表明「米政府は直ちに武力攻撃を中止せよ」「佐藤内閣はアメリカの侵略行動を是認している。われわれはこの現実を断じて許すことにはできない」との米、日本政府あての抗議文を採択し「米国のベトナム侵略即時中止、米軍の即時撤退」「日韓会談粉砕」など五つの大会宣言を可決した。

集會後、社会党全国会議員・都本部・区議員など二百をはじめ社青同地方代表労組地方代表数千人、学生、都労連の順でデモに出発。愛知関から外務省、大蔵省わきではやくも霞が関、静岡、三重、新潟長野などの代表の一部がジグザグデモをはじめた。国会に近い大蔵省裏で学生に突つこむ警察隊の弾圧、逮捕者が出た。これに抗して高速度道路の下りにかかった学生は一気に前へで社青同のジグザグデモのあとに入り込む。

米大使館が目の前の都電との交差点に

くつてかかり、動かない。その少し後に百に満たない唯一の民青系の学生がおとなしくしたがついてた。(東大駒場の民青学生若干はデモに加わらずに集會場で解散していた。民青は「カービン銃をかまえているところへ突撃するのかわ？」という四・二六闘争妨害のピラをまいたため、学生大衆にきゅうだんされたのである)。

夜の集會は六時から公務協、民間三万の労働者で開かれ、学生も昼の闘いにつづいて再び参加し日比谷の会場内外をうめた。公務協、民間三万の労働者が雨と暗やみの中、カサとプラカートを両手にもつものもみえて会場周辺は出発のかけこえて熱していた。

米大使館前あたりでは労働者の戦闘化をおそれ全電通の車は学生のデモと二十メートルの間におきおきしている。しかし全自交、日駐労などのジグザグデモははげしく警官隊とぶつかり、ライトの中で雨と汗の白いゆげがたちのぼっていた。新橋から敦寄屋橋への大道ではどの単車も道いっばいの三十一列スクラムデモがはじまった。

八時半、敦寄屋橋交差点で、学生がすわり込みを警官と乱闘の中で敢行した。後続の三十一列デモが近づく。警官隊が道路の左側におし込めようとおそやかまかい中におしこめられるとき、蒸気が圧縮されてせまいノズルを通るときのように一気にエネルギーが爆発する。作業服の

ままの困窮の仲間と警官がいりみだれる。全通も、宣伝カーのいなくなった全電通も。民間各単産の仲間も。

「今日のデモは安保以来だ！」と労働者がいうと「今日のデモは非常にあれいてデータラメですか……」と警官も動揺かくしきれず叫んでいた。

社青同、学生などの二十五名の不道逮捕にまげず九時半ごろまで東京駅八重洲口中央ホールで学生や労働者の解散集會がもたれ、輪をかいて「ガンバロー」のこぶしが上っていた。

学びとられた労働者民主主義

四・一七ストに「挑発」と「陰謀」の理由で反対し一一・七原潜闘争をサポートした共産党は四・二六に参加しなかった。そのことで四・二六の行動の力つよさは一層高まった。米占領軍を「解放軍」とよんで万才を叫んでおきながら二・一ストを「米軍のタンク」をひきあいだして弾圧し、「核実験をやったものは人類の敵」といっておきながらソ連、中国の核実験を支持し、いまた四・二六を総評の極左冒険主義とよんで妨害してきた共産党がいらないということは四・二六闘争を高める要因となっていた。

たちおくれっていたベトナム戦争反対行動にむかって腰の重い総評指導部を動かそうとして闘った労働者にとつてこれまでの総評の方針がたとえ日和見主義であったとしても何で冒険主義でありえよう。むしろ、これまでの闘いのたちおくれ

れをじりじりしながらも許していた点を反省していたからこそ、五万の大衆は戦闘化し、気のぬけた十八日の共産党のデモとはくらべものにならないほど前進したのである。むしろ警官隊の壁を突きやぶってさらに進めるべきであったという点さえだされたのである。

四・二六春闘の高まりと相乗作用して闘われた。六日からの合化の無期限スト、十三日の数年ぶりの鉄鋼統一スト、十六日の電機統一スト、二〇日の電通はじまって以来の半日スト、二三日の公務協の闘いと続いた経済闘争の高まりは、四・二六反戦闘争に流れ込み、さらに二八日の私鉄スト、三〇日の闘いの準備へと逆流していったのだ。

四・二六行動の動員と春闘ストとは当日の私鉄の動員と二十八日ストをみればわかるように、正確に対応し交流していたのである。

今春闘におけるヘゲモニーが、ダラ幹の意思を聞いてこえて下部大衆にうつりつあったのだ。このことは、労働者大衆が四・一七スト中止に対する深刻な教訓を学んだことをぬきにして考えることはできない。憤激の中に中止された今年の四・三〇ストさえ、四・一七と同じではない。テレビで中止指令をりながら、目の前にとどくまで闘いに入つた国電ストをみればあきらかだ。

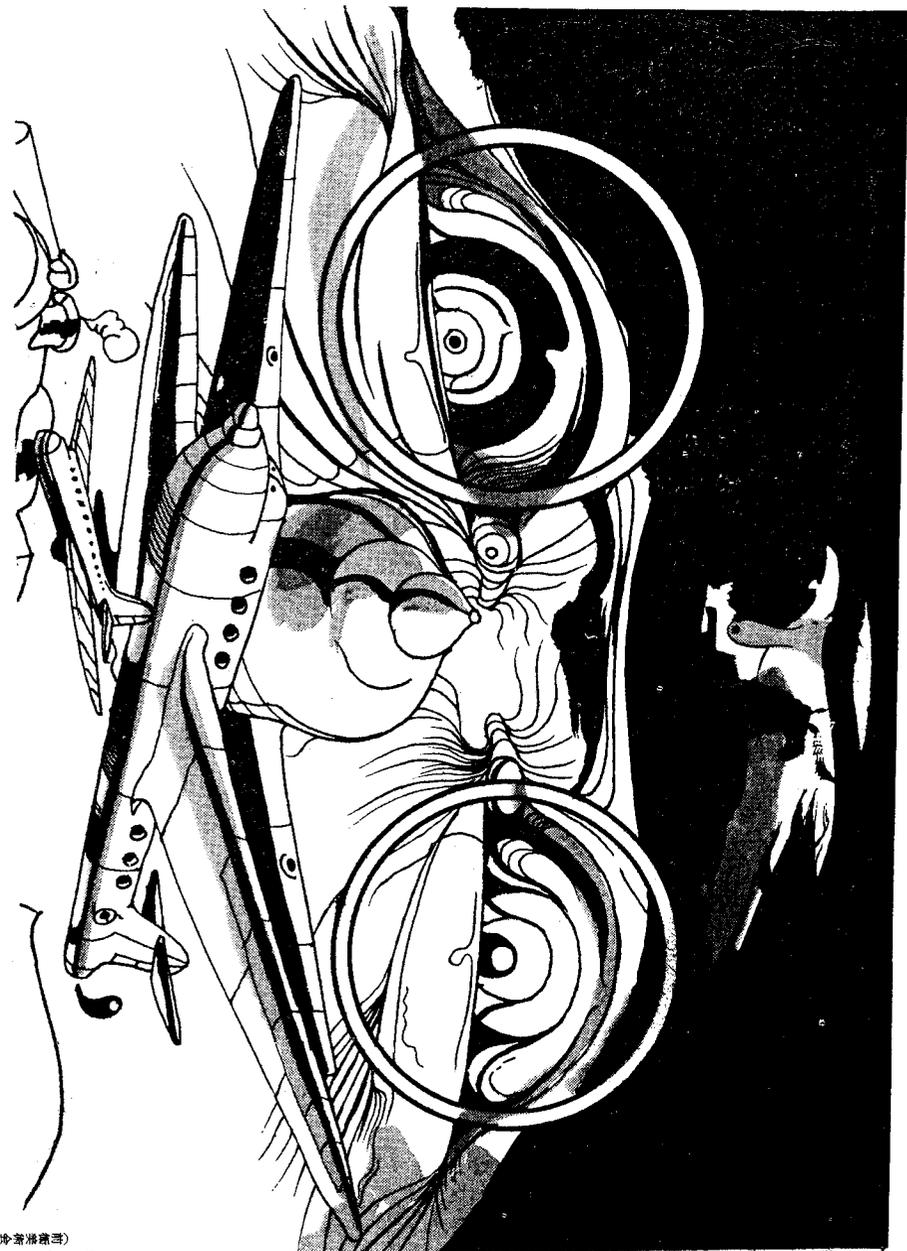
四・一七が、あいまいな口約束のトップ会談で中止されたとき、大衆は労働者

さしかかると、装甲車のバリケードと青カプトが大使館への道をかためている。「戦争反対」「侵略反対」「日韓粉砕」「警官はかえれ」のシヨプレヒョールの「警官隊の指揮者の声がかれる。四時、「すわり込んだぞ！」と後方へ走る者がいる。特許庁前で先頭からすわり込んだのだ。学生もスクラムをくんですわり込み代表が社会党の宣伝カーの上から労学共闘を訴える。デモの最後尾はまだ集會の入口あたりだった。後方の東水労の労働者は、幹部が「歩道へ上れ」と指揮するのに抗して「東水労は車道へもどれ」と車道へおりていた。

四時、雨がふりはじめた。ビルというビルの窓はすわり込みを目標する目でうまっている。すわり込みの真上の屋上から特許庁の労働者が組合旗をふるど、気がついたらデモ隊は一せいに交歓の嵐でこたえる。

四時半ごろ、社会党大使館抗議団代表の「ライシャワーはいなかった」との報告のあと議員団は動きはじめたが、大部分は学生のすわり込みのあとにつづいている。一時間のうち警官隊は支援にあつまった都民をまず排除にかかり、学生のゴボウスキをはじめた。だが後続部隊が前へではじまり、すわり込みを聞いてデモでつづける。警官が労働者と学生の間にサンドイッチのかたになった。都職労をはじめ雨と警官をはねかえすジグザクがつづいた。

おくれて到着した高校生二百が警官に



(原案) 藤野野矢

民主主義を唱びとっていた。共産党のスト妨害との闘いが、そして民同の中止指令に対する怒りが下部労働者大衆の力以外に闘いを守るものはありえないことを自覚させた。民同による共産党の除名処分がはじまったとき、共産党の裏切りを大衆討議で弾劾すべきであるとして、官僚的な処分に反対して闘ったとき、労働者大衆の主体性がどういうものかを知ったのだ。

これからの闘いの前進は、労働運動における「裏切り闘い」「どうせうらぎられる」という客観主義的な考え方をうちくたきはじめたのである。どうせそうなるという考えは民同ダラ幹の思惑が全てを決定するという考えを前提にしていたのである。春闘でのダラ幹の思惑は二重の意味でくずれた。支配的思惑がくずれるとき現実はずきつあるのだ。

「昨年以下ではやめなさい」と叫びながら資本がこの辺で手をうたつたらうと考えていた民同は、資本家総体が個別資本の回答を遅らせ、低額におさえようとする意志によって裏切られ、スト回避の口実を失ってぎりぎりまで遅らすように強制されたのである。日本資本主義の支柱たる民同指導部は資本主義の矛盾そのものに直面して動揺した。さらに、民同内部のセクト的自己保身から、太田ラインの統一指導がくずれることによって、この無責任指導の多元化の間をぬって、生命と生活の火の車をのみこんだ大衆の力がし昭然としたのだ。たとえば電通民同の

保身のためのセクト的指導と下部大衆の力はダブって矛盾の闘いの要因になっていた。闘いの結果は、総体として他産業の労働者に反響する。指導部がストライキを讃美すれば積極的な下部大衆は職場にて、職制を監視したのである。労働者階級の強い生命と生活と平和の要求の力が、資本主義の矛盾、民同内部の矛盾をつき動かす、ベトナム戦争と日韓会議にあつた国際的激動にちむかいつつあるということこそ、四・一七から今春闘と四・二六への前進の秘密である。

この力が、安保以来分断された労卒の戦闘的共闘の条件を生みだし、既成の条件を存在理由とする社共に対する不信が政党不信一般や組合不信一般をのりこえて新しい戦闘的組織、革命的組織性の必要を生みだしているのだ。四・二六に共産党はいなかった。社会党議員団はすぐ腰を上げた。デモをおさえているような宣伝カーが去ると大衆は本来の生氣に溢れて権力の壁をおしのけはじめた。四・二六はあれで、安保以来の闘いとなったのだ。

四・二六のシュプレヒコールからは、「平和を守れ」がきえて「戦争反対」にはつきり変って反戦意識が平和擁護意識にとつてかわった。だがこの反戦意識にさらに植民地主義反対の明確な意識を結合することが強く要求されている。三矢作戦をみるまでもなく今日のベトナムは明日の朝鮮であり、戦争と植民地主義は

帝国主義の二本の脚であり、したがってこれに対する闘いは帝国主義に対する痛打であるからである。

四・二六の中で、日本労働者・人民は反戦反植民地闘争のこれまでのたちおくれを克服し、その規模と労働者の中心部の戦闘的行動という階級的性格において世界最大の闘いを開始し、プロレタリア国際主義の任務をはたしつつある。

だがみよ。北緯はなお続きドミニカ人民の反乱は二万の米軍の反革命干渉によっておしつぶされようとしている。四・二六を闘ったものの決意はさらに倍する闘いによって、日本、沖縄自身が無難丸にならないといけないということではないか。

支配階級は春闘に対する大量処分の攻撃をかけてきた。民同指導部は処分反対闘争の方向をうちだしてはいないし、事態は切迫している。処分を許すことはこれまでの闘いの成果を無にすることだ。国鉄新潟の教訓を思いおこし、最後まで処分粉砕の闘いをつらぬかなければならぬ。これまでのように処分をゆるすことこそ、「挑発スト」という理由づけを許す一つの原因ではなかったか。

スト権奪還は処分粉砕ストを現実にするところのことによってかちとれるのである。この闘いの中で、春闘、四・二六の力をばねにし、五月闘争をかちぬくことだ。

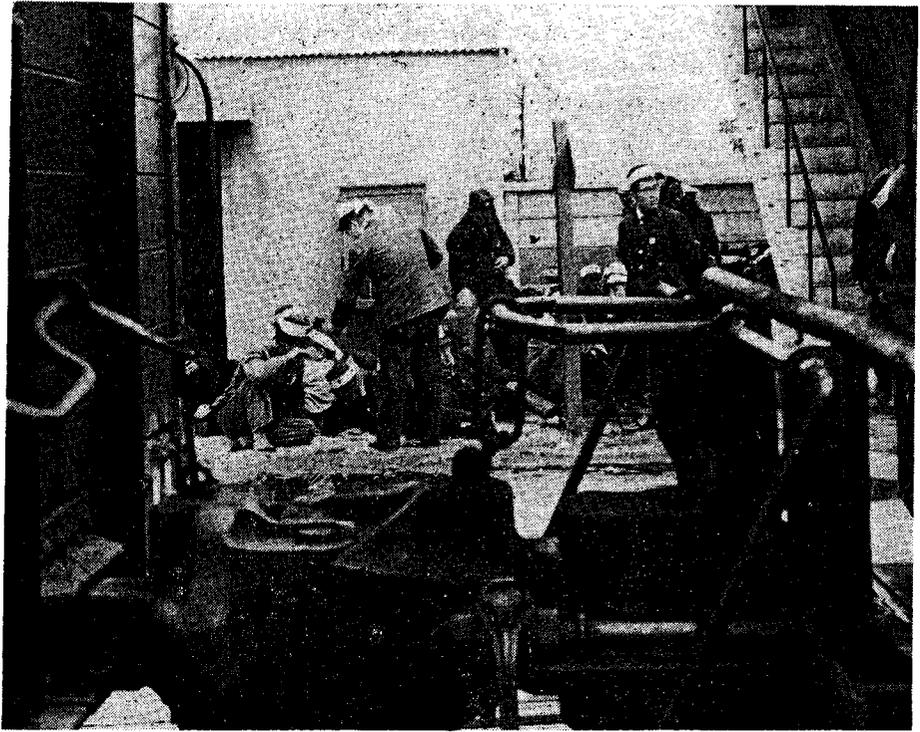
これが四・二六闘争がつきだしたものである。

前進/週刊/20週 400円(送料とも)/前進社

最前線/月刊 50円/6ヵ月 400円(送料とも)/労大出版部

中核/月刊 30円/6ヵ月 300円(送料とも)/前進社

共産主義者/季刊/250円/送料 50円/前進社



国電ストの実現めざして

〈ルポルタージュ〉——野島三郎

きずかれた万全の闘争体制

四月二十三日のスト中止に対する労働者の憤激によってきめられた三十日のストも、なんの具体的なとりきめもないままに「仲裁」になって、他の単産なみに努力する」ということで三十日午前五時すぎに中止された。

だが、安保闘争における六・四スト以来の国電ストを軸とする三十日の国電ストは、戦後労働運動のなかで、たえずその中核となりその先頭に立って闘って来た国鉄労働者の闘争力がみじんも失なわれていないばかりか、再び上昇線をたどりつつあることを示した。

たしかにスト中止指令は午前五時すぎにだされたが、二十七日以来三十日にむけての職場闘争による闘争の積みあげと実質的には三十日午前六時頃（ところによって違うが五時四十分―六時二十五分までの間）まで戦闘的にストを決定することによって国鉄労働者はそのことを実証したのである。

特徴的なことは職場の闘争体制が、どこでも実に万全といえる戦闘的な状態をつくりあげ、三時間ストの貫徹はただただ幹部の決意にかかっていたことである。

ともともと国労幹部は「三月には合理化問題を、四月には賃金問題を解決し、五月には選挙闘争を」という安易なまかえ

働者諸君を今日の戦列の中に見出すことができないのは、一体どうしたことなのであるか。

国労の幹部はストを中止させるにあたって「いまストをやっても第二次賃上げ回答は出そうにない、抗議ストに終るから四・三〇ストを私鉄と共に闘いたい」という理由をあげている。

たしかに当局はその回答を一步もゆるうとせず、また今日の闘いで大巾賃上げを闘いとれるとは限らない、という極めて困難な状況にあることは事実である。

だが、一体、闘争を強めることによってではなく、闘争を弱めることによって、当局の五百円という理不尽な低額回答を打破できるのであるか。鉄鋼独占の千五百円の回答は、ひとり鉄鋼労働者にかかれた攻撃ではない。政府・資本家階級は、この「一発回答」をもって全労働者階級をねじふせようとしているのだ。

今日のストを公労協が統一ストで闘いぬくことによってこそ四月六日以前の合化の無期限スト、七年ぶりの鉄鋼の統一スト、十六日と二十一日の五車通のストなど、民間基幹産業を軸とした巨大な波状ストの高まりを、官民一体の全階級の総反撃に結果していくことができるのだ。公労協にはその任務が与えられていたのではないだろうか。

しかなく、はじめはストライキをかけて闘うといった方針をもっていなかった。そうした取り組みの欠陥は、前々から職場よりするどく追求されていたが、同時に組合員大衆の盛りあがらない状態として反映していた。

四・二三ストがきまってきたとき職場にはこんな状態で闘争が起きるかという不安が少なからずあった。しかし職場の先進的労働者を先頭としたオルグ活動によって闘いの体制がからとられつつあった。

鉄鋼労働者に加えられた千五百円の一発回答は、鉄鋼労働者に加えられた攻撃のみではなく、公労協労働者はじめ全労働者階級への低額回答の攻撃でもあった。合化、鉄鋼、電機、全電通と続いた大きな波状ストの高まりはそのことを国鉄労働者に教えたばかりでなく、低額回答打破めざして国鉄労働者の奮起を促したのである。

また政府・資本家階級・当局のあくなく攻撃に苦悩している職場労働者は、一旦ストライキが決定されれば断固たる闘いに立ちあがる状態にあった。当局の厳しい姿勢とこうした下部からの無言の圧力との間で、四・二三ストへむかって、国労本部と東京地本との対立は拍車をかけられていた。職場労働者は拠点闘争ではなく全職場のスト突入を要求していた。日共は日共としては無方針ではあったが革同としてはこうした職場労働者の声にのっかって「全職場がストへ、全職場が闘えないならば、ストをやめろ」という

否定的な突きあげをやっていた。こうして東京地本は四・二三全職場のスト突入の方針をうちたした。公労協と国労本部は東京地本の方針に反対し幹部間の対立はかかってない激しいものとなった。四・二三ストは「カラ打ちストになるから」ということで中止され、ストは四・三〇へ延期された。

四・二三スト中止は、これに対する取りくみに職場労働者が全力をあげて闘ってきただけに組合員大衆のあからさまな不満と不信を職場にみながらさせた。

革共同・全国委員会、マル青労同・国鉄委員会「延期で低額回答を破れるか四・三〇ストへ戦列を再強化しよう」という次のようなピラミッドを二十三日に国鉄各職場に行なった。

幹部の弱点を克服しストへ

■二十三日の国鉄委員会のピラ

当局の弾圧をはねのけ、今日のストに向けて職場から戦列を固めてきた国鉄労働者諸君！

動力車、全通、全電通の仲間を先頭にして、公労協の仲間たちは、今日のストの実現に向けて、いま闘いを進めていく。

国鉄労働者諸君！
戦後労働運動のなかで、いつも公労協の先頭に立って闘ってきた国労の勞

サイフのヒモを固くしめしている政府・資本家階級をおびやかして、大巾賃上げを闘いこの力となるのはこうした闘争だ。これまで公労協ストの柱となり先頭を切って闘ってきた国労ストを中止したことは、政府・資本家階級の回答の力をますます厚くすることに働くだろう。

国労の諸君！

今日のストを諸君が公労協とともに闘えないのは残念なことではあるが、他の公労協の仲間は国労の四・三〇ストに期待し、その闘いを注目している。この闘いへ向けて今たちに戦列を再強化することこそが、何よりも動力車全通、全電通の仲間たちへの心強い支援なのだ。四・三〇を戦闘的に闘いぬくことが、当局の低額回答を打破する唯一の方向である。ただ国労の幹部は闘うと約束しておきながら闘争を放棄してしまふ傾向がないわけではない。こうした幹部の弱点を職場からの闘いによって克服し、その動向を監視し、四・三〇ストを貫徹させるのは国労の諸君、諸君の役割である。

動力車の諸君！

国労のスト中止は、動力車の幹部が闘争を弱める恰好（かっこう）の理由を与える方向に働いている。こうした弱点を職場から克服し今日を断固として闘いぬき、四・三〇ストに結集する

よぐという指令以上の指導はけつしてしなかつた。労働者達はやむなく機動隊を前にしてスクラムを組んで氣勢をあげ、労働歌をうたつて闘うにとどまざるをえなかつた。しかし、当局は初電を運転させたものの次の電車からは完全にストップを断固として貫徹するという国労幹部の姿勢だけであつた。

指令くるまで 戦列固め貫徹

各職場に起つていた分裂・新国労という組織問題があるから聞えないとこれまで幹部は説明してきたし、職場労働者もそう思い込んで来た。だが分裂という痛手をのりこえて職場労働者のほとんどが各拠点（品川では品川電車区）に結集してきた。実際これまで動員にあまり結果してこなかったところも多く結集してきた。またある職場が動員費をふやすために水まし動員報告をしているのを現場でみている別のある職場は百多近い動員を知らとつて来ながら、それをグチ一つこぼすこともなく戦列を一層かためるために努力している。こうしたことは昨年までみることのなかつた前むきの姿勢といえる。しかもマスコミが五時すぎにストップを報じたのを職場労働者は聞いていた。だが六時まで地本の指令がくるまでストップを聞いつづけた。また地本はストップ指令を出そうとせずそのため国労本部

が自ら伝令となつて各職場に中止指令を伝えた。闘争の中で職場労働者の闘争意欲と当局との万力の間にはさまつて民間幹部はばらばらに分解しつつあるのだ。四・三〇の指示は、すでに幹部の意思だけで闘争を左右することは困難となりつつあり、闘争のヘゲモニーが次第に組合員大衆にうつりはじめていることを示しつつあるのだ。このことはこうした闘争大衆の力に依拠することによって、職場のなかに闘争指導部を確立するその可能性をますます明白にしたのである。

「こまできて 中止できるか

京浜東北線は初電から完全にストップしている。南浦和電車区、下十条電車区では地本の外山委員長が逮捕され、南浦和と蒲田電車区ではホームの中線に留置されていた電車の乗務員室に職場労働者がぎっしりつまり、パンダグラフを降してしまい、公安官と機動隊がやってきたときには、職場労働者の要請でそのまわりを各職場から結集してきた労働者と外部の支援労働者に二重に守られて手も出せない。これもまた職場労働者の激しいつきあいで聞いたられた防衛闘争だったので。浦電の庫も同じくそのように当局側と権力からは手も足もでない態勢をからとつていた。

青年労働者がほとんどいなかった千葉地本の両国駅での闘いは五時五分発の房総、千葉方面への列車を五時四十分まで阻止して闘われている。その場合も国労本部がすでにストップしているにもかかわらず、一切処分しないという約束でもって列車のビケを解いているのである。中・老年層の多かつたこの職場労働者の部隊は午前三時頃マスコミがストップの努力を伝えるたびに、また裏切るつもりか、こまで来て中止なんて馬鹿にするな、今度は必ずやれよ、などと口々に叫んでいた。

中央線の中野電車区でも当局側は一本だけを動かしたたが、後は職場労働者の

池袋地区の闘い

四・三〇ストが職場労働者の手によって大団に切り開かれた闘争であることを如実に示したのは池袋電車区の闘いである。池袋電車区の闘争を指導した現地指導部は当局との「紳士協定」がそれだけで組合側にとんな場合も有利に動くものという馬鹿げた形式主義におちこんでいたのだろうか、それとも闘争に体を張ることになんの「利益」もないという無力におちこんでいたのだろうか。二十九日夜になつてもまだ事態はつぎのようであつた。

電車から降りたばかりの乗務員はホームから運転事務室にいつてそこで運転助

闘いにおしまくられて公安官は遠くについて近よることもできない闘いが組まれている。他方では同じ中央線の三鷹電車区では乗務員確保の段階ですでに当局側におしまくられ、三十日早朝においても当局側の運転はほとんど妨害をうけなかつた。これは全面的に現場指導部の問題であるが、少数の職闘的労働者の先進的な闘いにもかかわらず職場労働者の闘争意欲が現場指導部を闘わせ、それをのりこえ得るほどに結集されていなかったことによるのだ。なによりも職場労働者の圧倒的部分が闘争の経験を持っていないのである。

役の点呼をうける。二十九日の昼まではどの拠点職場もその点は同じである。ただその場合もほとんどの職場では、組合側は運転事務室内に入つて当局側と対決し、乗務員だけをそのなかに孤立させることはしない。ところが池袋ではその間組合側は事務室の外で当局の点呼がすむのを辛棒づく（？）待つのである。乗務員は、助役ばかりではなく電車区長をふくむ管理者の「点呼」をうけるのであるが、当の乗務員にとってはたとえそれが五分であろうとも二十分かと思われる——と乗務員は口々に訴えていた——内の時間を局側のオルグにさらされ



ながら耐えねばならないのである。

現地指導部へ たかまる怒り

このこと自体すでに現地指導部の指導の放棄なのであるが、それでも乗務員が「家へ帰ります」といって局側から逃げてさくれば組合側の管理に入るのである。つまり勤務がおわれば誰れも個人を拘束できないのであつて乗務員の階級意識にかかっているのである。ところが夜の九時になつてもそうした「紳士協定」をつづけるならば、アケでない泊りの乗務員にはなんの大義名分もなく全くの個人の意志で勤務を放棄しなくてはならないのである。そうした乗務員が大多数であり、二十九日夜九時頃には職場労働者の不満はしだいに現地指導部への怒りにかわり、職場はピーンとはりつめてくる。

職場労働者は現地指導部につめよりはげしく抗議をはじめ。突如、指導部は怒鳴りつけられ、あつというまに数人の労働者がホームについた電車の乗務員室に入りこみ、直接組合側へ乗務員を確保していく。次の電車も同じように乗務員が確保される。当局側が一方的に破つていた「紳士協定」は職場労働者の側からも破られたのだ。当局側は三本目になつてやっと現地指導部との「協定」があてにならないことに気づく。彼等はばらばらとかけよつてくる。もみあいが一寸起

る。だがすでに圧倒的労働者が乗務員確保に参加して闘われている。なにひとつ当局側は手をだすことができない。現地指導部はのりこえられたのだ。彼等はつきにその破産を暴露されるだろう。当局側はいまやその支柱を失いつつある。だが現地指導部はその前に一つでっかい裏切りをやつた。職場労働者が三十日早朝の闘争を前に仮眠をとることになつた。そのとき何時に起きるか現地指導部はなにひとつ指示しなかつた。三十日、池袋発の始発が当局側によって動かされようとしたとき何人かの自発的に起きたら職場労働者がぼつぼつ結果はじめたばかりであつた。現地指導部は職場労働者をたたき出すことさえやらなかつた。そのため当局側は始発電車を六、七人の現場指導部をほぼ三十人の公安官によってなんなく排除して出発させた。職場労働者はぼう然とし、怒り、泣いた。

こまで闘つて来て一体どうしたのだ、と。

ついに電車は 出発した……

三十日午前五時十五分、国労本部はストップを中止した。事態はなによりもはやくマスコミによって職場労働者に伝えられた。ストは一時間で終了、抵抗は一時間であり、追いつめられた職場労働者はいままやられる側になつた。これがいままでの事態であり、経験の教えるところで

酵母党となるなかれ

荒畑寒村

この一文は、北小路敏君から社会主義労働者戦線の目的や運動について意見を徴せられ、反対の意見でもかまわないからという、回書の手紙も少し難く寄稿したものである。

社会主義労働者戦線の意図に対しては、私は大いに同情し且つその意気精神を社とするものであるが、猶且つその運動に賛意を表し得ないことを深く遺憾とする。その理由は凡そ二つある。

第一に、諸君はすでに参議院議員選挙に候補者を立てているが、今はまだ一人でも将来はもっと多くの候補者を立てるつもりであろう。また事情さえ許せば、衆議院にも地方自治体の議会にも、代表者を選出させようとするであろう。さすれば、名称は何であれ、実質は政党にちがいない。そして独立の政党である以上、各地に支部を組織し、専従者を維持し、党員を募集し、平素の宣伝活動をおこない、議員選挙に参加しなければならないことは勿論であるが、これには莫大な資金を要することを覚悟しなければならぬ。

諸君もご承知のように、政党は毎年その収入を届け出なければならぬので、たとえば社会党は数千万円、共産党は数億円の収入を報告している。こんな巨額の資金源が国内にあるのか海外にあるのか、その詮索は二の次としても、政党の維持運営

にはこんな大金を要することだけは明らかである。諸君の運動には、果してその成算があるのだろうか。

資金難の問題だけで運動の成否を決することができないのは、いうまでもないが、私は諸君の独立の政党組織にもっと重大な問題があると思う。そしてこの第二点は、諸君の運動にとって根本的な問題だと思っている。それは、現在にもかくにも労働者階級を基盤として存在している共産党や社会党の外に、もう一つ別個の社会主義政党をつくる必要と理由があるだろうか、ということだ。

諸君は共産党にも社会党にも失望し、反対して、別個独立の政党を組織しようとする。私には諸君の心事がよく理解できるし、また同情を禁じ得ないのであるが、しかし私は諸君といささか認識を異にしている。たとえば、諸君は共産党も社会党もともに革命的な社会主義の党たる実を失い、とうてい改革の可能性はないと見切りをつけているのであるが、私の見るところはちがう。

日本共産党に関しては、私はアレが日本人の政党だと思っていない。日本人の頭脳で思考し日本人の心情で判断せず、ソビエト人や中国人の利害を代弁しているに過ぎない党は、外国人の政党であって日本人とは無関係だと思っている。樹木の良否はその果実で知られるというのが、見解を異にする者はただちに除名する党。方針を誤まって失敗しても、党の資金で待合を新築した幹部を出しても、火焔びんゴッコで信用を落した政策を

とつても、労働者のストライキを裏切つても、責任をとらないで居すわっている幹部。こんな党のどこに党内デモクラシーの原則、思想的な純潔、言行の一致が認められようか。幹部の専制と党員の盲従とが幸として抜き難い共産党は、内部から改革する可能性がまったくないと見なければならぬ。

だが、社会党にはその可能性があるかと私は考えている。現在の社会党が、社会主義の原則を忘れ、革命の情熱を失い、新社会建設の理想を欠いて議会主義党に転落していることは事実である。議会における党の代表者が小ブルジョア生活の安逸になれて、殉道者的な犠牲的精神を欠いていることも事実である。独り中央部ばかりではない地方支部の役員までが政治的ポスと化し、国会議員ばかりではない自治体の議員までが腐敗堕落し、一身の栄達のみを求めて社会主義の信念のカケラさえない者が多いことも事実である。

それでも猶、社会党は決して共産党のように動脈硬化症に陥っていない。思想的にも、組織的にも、それがまた一面には弱点でもあるのだが、流動的であって固定化していない。もし社会党の幹部にして、共産党の幹部のように党の金を待合に注ぎ込んだり、ストライキを公然と裏切ったり、政策の指導を誤まつて失敗を招いたりする者があつたら、党員は決して黙して見ないだろう。共産党のように秘密会でない公開の社会党大会でたとえ幼稚素朴な意見にもせよ幹部批判の論難を聞かないことではないのは、不完全ながらも党内デモクラシーの存する証拠ではないか。

社会党の派閥が、党を厳格な綱領のもとに一致結束した組織体としないうで、政治クラブ化していることも事実であるが、しかし派閥の存在もまた、党が思想的に固定しない流動状態にある一証左といえなくもない。言いかえれば、革命的な社会主義の理論が食い込み得る、或は現在の党指導部の大勢を制している改良主義的風潮を打破し得る、余地が存するのとあるであろう。私は現在の社会党が、大勢としては議会主義政党に墮している事実を否認する者ではない。だが、党員の間にはたとえ少数にもしろかかる方針に懐かず、純然たる社会主義政党としての

体質改善を要求する声も、また決して絶無ではないのである。

否、党の幹部すら重大な問題に当面して、体質改善の必要に迫られている。重大問題とは何か、それは新聞紙これを伝え、党大会またこれを認めた青年層の間における社会党支持率の減退だ。

なぜ、青年層の間に社会党の支持率が減退しているか。私として言わしめれば、社会党が魅力を欠いているからだ。社会党はからさを失った塩だからだ。見給え、総評系の組合労働者は四百五十万といわれ、そして総評の大会はつねに社会党支持を決定している。さすれば、少なくとも見積つて一割の組合員が入党したとしても、社会党は四十五万の党員を有すべき筈であるのに、実際は五万そこそこ過ぎないのは、社会党が魅力を欠く何よりの証拠ではないか。

魅力とは何ぞや、他なし、社会主義革命の理想、情熱である。

理論と実践と、いわゆる知行合一の意気、精神である。かつては日露戦争の最中でさえ、私たちの先輩は公開の演説会を開いて堂々と戦争反対の叫びをあげ、青年同志は戦時下の苛烈な迫害を冒して東海道、山陽道、九州一円、東北地方に社会主義を宣伝した。もし社会党の国会議員にして議会の議事規則に通じブルジョア政党との駆け引きに長ずるのみに甘んぜず、社会主義の理想に殉ずるの情熱を傾け、プロレタリアト解放の使命感に徹したならば、現状を抱かざるはない青年層はおそらく、労働者、農民、インテリゲンチヤ、小市民層は軒然として社会党の傘下に集まるであろう。党員はやつと五万内外に過ぎず、議会で三分の一の壁が破れないなどというのは、その責め一に社会党自身の負うべきものだ、私は信ずる。

諸君は私の社会党観に対して、或はおそらく余りに楽観的だといふかも知れない。だが、私は現状の不備欠陥、宿弊弱点にもかかわらず、社会党が眞の社会主義政党に純化し発展すべき潜在的な能力があると信じている。現在の社会党に対して多大の不満を感じている点で私は諸君と同一であるが、しかし私は諸君のように絶望し、見切りをつけてはいない。



荒畑寒村氏

意志表示

社会主義労働者戦線結成によせて

1965年6月1日発行

定価 300円

編集・発行

社会主義労働者戦線

革命的共産主義者同盟全国委員会／東京都豊島区池袋東1-50 佐藤ビル 前進社

共産主義者同盟／東京都文京区本郷1丁目8の18 黎明社

長崎造船社会主義研究会／長崎市飽の浦町3の86 久保田達郎気付

現在の社会党はたしかに魅力——社会主義革命の理想、情熱——を欠いているが、しかしこの現状に不満を感じている者は、下部黨員の間にも幹部の中にも存在する。ただ彼等は党のもっとも弱点である理論的教育と宣伝との関却欠如のために明確な具体策をもち得ないで閣下模索しているのである。彼等に理論上の知識を与え、彼等に革命的情熱の火を点じ、新しい魂を吹き込まれた集団の人数と勢力とが増大するに至れば、社会党の体質ははじめて改善されるであろう。社会党は純真な社会主義の党と呼ぶにふさわしい理論上、実践上の魅力をもつに至るであろう。

たとえて言えば、現在の社会党は小麦粉を捏ねただけの塊まりに過ぎない。彼等はその内部に酵母を欠いているために、香ばしい美味いパンにならないのである。そして私は、この酵母の役をつとめるものは即ち諸君に外ならないと思う。だが、酵母だけではパンにならない。酵母が小麦粉と一緒に練り合わされ、日常活動の实践的オーヴンの中で焼き上げられた時、はじめて栄養価の高い美味いパンになるのだ。私は憚らずに直言するが、諸君は小麦粉の塊まりが革命的にふくらまないのに絶望して、酵母党を作ろうとしている。

私がこう言ったら、諸君はきっと反駁するだろう。小麦粉の塊まりとは大衆である。われわれは社会党の如き既成組織を相手にしないで、直接に大衆の中に入って革命的なパンを造るのだ。それも結構であるが、それには既記の如き非常な困難を伴うことを覚悟しなければならぬ。その資金と時間と精力との困難を克服するだけの決意をもって、なぜ既存の社会党を内部から改革しようとするのであろうか。諸君が別に独立の革命的政党を組織すれば、社会党は純真な社会主義政党に発展する途を閉ざされて、まったく改良主義的な議会政党に固定してしまいもう一つの民社党ができ上がる結果に面するだけだろう。

社会党はまだ決して固定していない。流動的な状態にある。そこに、諸君の入り込む機会があり、諸君の活動する余地が存している。ロシアの一八七三年の夏は「気違いの夏」といわれ

編集後記

われわれが今日、もっとも緊急にせまられている態度は、自己解放の唯一の、終局的な道としてプロレタリアートによる社会主義世界革命の実現のための闘いに参加するか、いなか、ということだ。既成の運動や組織が呪縛されてきたドグマチズムをのりこえ、プロレタリアートの世界的連帯をより広く、より深くおしすすめる闘いなのである。むろん、社会主義の立場を完徹するためにクレムリン官僚か、北京政府のどちらかの立場を採択し、追随するかということが問題なのではない。中ソの指導層の反プロレタリアの本質を糾弾するわれわれの立場は非現実的であり、たんなる少数の「トロキスト」であるという非難のなかでも、労働者大衆のなかに根深く浸透している既存の指導者て組織への不信はふかまり、われわれの連帯は強まっ

ている。正系か、異端か、というおしきせの言葉はむろん、今日における革命的な立場を充分説明するものではない。『反道徳的』快樂主義者から心情的社会主義者に至るまで、今日ほど異端者を自認し、反体制的風貌をもちたがる傾向が強まっていることはない。しかし彼らの理性やヒューマニズムはせいぜい、現状をいかに心よく、あるいはユニークに生きるか、ということにある。その意味でかれらの心情に反してかれらは

た。それは革命的熱情に燃えたインテリゲンチアが、実に四人も浴々として農村や工場に入り込んで社会主義の宣伝活動を開始したからで、いわゆる「ヴ・ナロード」(人民の中へ行く)の熱狂的な運動を形容した言葉である。いまの日本は、インテリゲンチアが直接に農村や工場へ入って宣伝活動を開始した当時のロシアとは、事情がちがう。しかし日本の革命的インテリゲンチアは、その同じ理想、同じ情熱をもって「社会党の中へ行く」べきではないか。

以上が私の愚見です。老来、筆をとるにもうつく、殊に旅行に出る準備に忙殺されて意をつくしません、諸君の寛容を請う次第です。
(社会運動家)

田川和夫著

日本共産党史

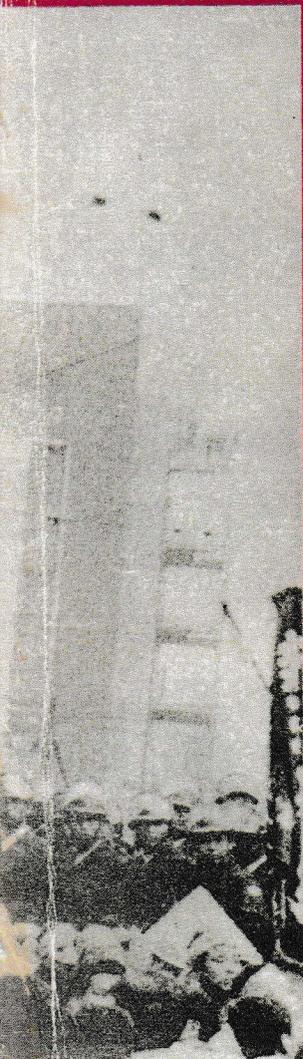
新装改訂版

38年間の「革命的伝統」／激動期における日本共産党／50年分裂とその教訓／極左から極右へ／1955年の転機と六全協／官僚体制の危機とその再編／第7回大会とスターニストの「勝利」／「未来なき前衛」／新版へのあとがき

現代思潮社刊 定価400円

現代におけるもっとも通俗的な存在の仕方にとどまざるをえないのである。異端者という銘辞を自他移したがるかれらの言葉のニューアンスにしたがえば、激化する東西両体制の対立のはざま、ベトナムやドミニカ、朝鮮を焦点点として尖えあがっている世界の矛盾の根源を階級対立のなかにみつめ、プロレタリアの解なくしては終局的な世界の平和も、自己の解放も実現しえないとする革命的マルクス主義の立場こそ、古めかしいドグマチズムによりすがる異端者として映るにちがいない。

△絶望は精神に於ける病、自己に於ける病いであり、したがってそれには三つの場合がありうる。——絶望的に、自己をもっていることを自覚していない場合(非本来的な絶望)。絶望的に、自分自身であろうとしない場合。絶望的に、自分自身である場合▽というキルケゴールの概念によれば反道徳主義者も、心情的社会主義者も、自己における絶望を直視しえず現世に身売りにしている「女性的な絶望」のなかに自らを呪縛している存在であり、この精神の病いはいかに死に至らないのである。キルケゴールが単なる受難ではなく自発的な行動であるとして、積極的に評価している絶望に自己自身であるとする立場こそ、現実の秩序を根底から止揚することによって、自己を完徹する社会主義世界革命の立場にたつものを象徴的に表現しているといえる。それは今日における唯一の正系の立場なのであり真に自己を解放しうる存在なのである。
(A・K)



社会主義労働者戦線／発行 300円